

FEDERATION CYNOLOGIQUE INTERNATIONALE (AISBL)

13, Place Albert 1er, B-6530 Thuin (Belgique), tel : +32.71.59.12.38, fax : +32.71.59.22.29, internet : <http://www.fci.be>

国際作業犬試験規定

Internationale Gebrauchshunde Prüfungsordnung

für die
internationalen Gebrauchshundeprüfungen
internationalen Fährtenhundeproofungen
internationalen Begleithundeproofungen
internationalen Stöberprüfungen
internationalen Ausdauerprüfungen
der FCI



FCI 作業犬委員会の委託を受け以下のメンバーで作成

Wilfried Schäpermeier (D) +
Günther Diegel (D)
Robert Markschläger (A)
Heinz Gerdes (D)
Hari Arcon (SL)
Clemente Grosso (IT)
Frans Jansen (NL)

本規定は 2018 年 9 月 24 日 FCI 理事会において承認された

2019 年 1 月 1 日より有効

翻訳（独 ⇒ 日）益田晴夫

前文

3万5千年以上前から犬は人間の仲間です。犬は家畜化によって、人との緊密な社会関係が築かれました。私たちは生活におけるいくつかの分野で犬に依存しています。それゆえに、われわれは犬の幸福のために責任を持たなければなりません。

実際のトレーニングが行われる際には、犬の身体的健康と精神的健康が最優先で守られなければなりません。動物に対する第一の原則として、非暴力的に接しなければなりません。さらに、十分な食べ物と水の供給。そして、健康維持のための予防接種や定期健康診断。定期的なふれあいと運動。これらはすべてわれわれの義務です。

歴史の過程において、犬は人間を助けるさまざまな仕事を行ってきました。現代社会ではテクノロジーの進歩によって、彼らの任務の多くはもう必要とされません。したがって、失われた役割の代わりとして、犬の性質に応じた十分な運動や活動を、人との強いふれあい関係を通して与えることは、現代の犬の所有者の義務です。その観点から、同伴犬試験 (BH/VT)、各種作業犬試験 (FPr 1-3, UPr 1-3, SPr 1-3, IGP-1~3, etc)、追求犬試験 (IFH)、物品搜索試験 (Stöberprüfung) は行われます。犬の才能や性能素質に相応しい試験を選択しなければなりません。適切な運動とともに、その犬の使役活動に対する学習能力と運動能力を見極めなければなりません。さまざまな形態のドッグスポーツは、これらの目的のためにとっても適しています。現代社会においても要求される労働犬作出の役目も担っています。

人が犬を訓練したり、ともにドッグスポーツを行うというのは、信頼関係の中で教育を行うということです。そして、人と犬との間に調和を構築することです。トレーニングとは、人が犬に学習情報を与えることですが、それぞれの犬が理解できるような方法でなければなりません。人と犬の息のあった調和は、すべてのドッグスポーツにおける動きの基礎です。調和構築のために、犬の考えと才能を理解しなければなりません。

人は倫理的義務として犬を育て、十分な教育をしなければなりません。それには、行動学と専門的な犬学の知識を身につけなければなりません。実証的な訓練方法やトレーニングで効果を得るべきで、決して暴力的に行ってははいけません。そして、動物愛護に反する教育やトレーニングが行われてはいけません (動物保護法を参照)。犬がスポーツに参加する際は、才能や技量、気構えが整っていなければなりません。運動能力を高めるための薬物投与がなされた犬や、そのことに関係する人物の参加は認められません。そのような疑いがある場合には、その犬について調査が行われます。倫理に反する犬の性能向上願望は間違っています。犬に対する責務の自覚を持つ愛犬家と健康な犬のみが、試験、競技会、そしてトレーニングに参加することができます。

目次

2	… 前文
4	… 一般的な省略記号／略語
4	… 有効力
4	… 全般
5	… 試験実施シーズン
5	… 試験開催日
6	… 試験組織／試験監督 (PL)
6	… 試験監視員
6	… 訓練審査員 (LR) 本規定書では審査員と記載
7	… 出場規定
8	… アンチドーピングと予防接種
8	… 社会的適応
9	… 各種目のセクション単位 (1日)
9	… 試験出場者
9	… 体が不自由な試験出場者
10	… 首輪の義務／リードの携帯
10	… 口輪装着義務
10	… 賠償責任
10	… 予防接種
10	… 表彰式、賞品授与
10	… 訓練タイトル
11	… 訓練手帳 (スコアブック)
11	… “TSB” 評価 (全試験段階の防衛に適用)
12	… 命令
12	… 国際規定／特別規定
12	… 世界選手権／ヨーロッパ選手権
12	… 懲戒法
13	… 試験失格 (Disqualifikation)
14	… 中止 (Abbruch)
14	… 病気／負傷による中止
14	… 性格 (虚心) テスト
15	… 個体確認 (ID チェック)
16	… 銃声に対して臆病な犬 (gun-shy)
16	… 評価 (叙述／審査講評)
18	… 防衛ヘルパー規定 Helferbestimmungen
22	… BH/VT コンパニオンドッグ試験+道路での安全性確認
26	… A 追求作業 Fahrtenarbeit
33	… B 服従 Unterordnung
47	… C 防衛 Schutzdienst (IGP-1~3)
57	… IGP-ZTP 国際作業犬繁殖適性試験
59	… IGP-V 国際作業犬基礎試験
61	… FPr, UPr, SPr, GPr (IGP 単課目)
63	… IAD 国際耐久性試験
65	… 追求コース／印跡要領
69	… IGP 添付資料

一般的な省略記号／略語

FCI … 国際畜犬連盟	Federation Cynologique International
IGP … 国際作業犬試験規定	Internationale Gebrauchshunde Prüfungsordnung
NPO … 国内試験規定	Nationale Prüfungsordnung
LAO … 各国組織	Landesorganisation
AKZ … 訓練資格	Ausbildungskenzeichen
LR … 訓練審査員	Leistungsrichter
GST … 基本姿勢	Grundstellung
PO … 試験規定	Prüfungsordnung
RA … 審査員の指示	Richteranweisung
HZ … 命令	Hörzeichen
PL … 試験監督	Prüfungsleiter
HL … 防衛ヘルパー	Helfer
HF … ハンドラー	Hundeführer
FL … 追求印跡者	Fährtenleger

有効力

この試験規定は 2019 年 1 月 1 日より有効。FCI 作業犬委員会によって作成された本規定は 2018 年 9 月 24 日、FCI 理事会において承認され確定した。

この試験規定の発効にともない、これまでのすべての規定は有効性を失う。
この国際試験規定は委員会によってドイツ語で審議され起草された。

この国際作業犬試験規定（IGP）は、F.C.I.の全加盟国に適用される。
すべての国際訓練イベント（試験・競技会）は、この試験規定の対象となる。

全般

試験・競技会の開催には二つの目的がある：

1. 犬の各使用目的に対する適性判断
2. 犬の健康維持と運動の推進

FCI に加盟している各国組織（LAO）は、国際作業犬試験規定を推進・推奨する。特に国際競技会は、国際作業犬試験規定で開催されなければならない。試験・競技会において、実行組織と参加者はスポーツマンシップにのっとりて実行・行動しなければならない。すべての関係者は試験規定を厳守しなければならない。すべての参加者は同一のパフォーマンス課題を実行しなければならない。試験内容は全出場者に対して平等でなければならない。会員に試験の開催場所と日時を公示する。

試験・競技会は、各試験段階と各セクション（追求・服従・防衛）のレベルが一致していなければならない。各試験段階の各セクションにおいて合格点を獲得した場合にのみ訓練資格が与えられる。すべての FCI 加盟国は、その訓練資格を認めなければならない。

試験は段階受験でなければならない（レベル 1→2→3）。一つ上の段階を受験するには、その下の段階において、追求・服従・防衛、各セクションで、最低“B 評価”を獲得して合格していなければならない。各試験段階に合格しても、その段階にとどまって繰り返し（リピーター）受験することが可能である。原則として合格した段階よりも下のレベルには出場できないが、順位や評価のない非公式の試験であれば別とする。

試験実施シーズン

天候に問題がないなら試験は年間を通して開催できる。もし、人と犬の安全と健康に影響があるような場合は、審査員の判断により試験開催は中止されなければならない。各国組織は自国の季節の関係で、試験開催の可能な期間を限定することができる。

試験開催日

a) 土曜日、日曜日、祝日

原則として、試験日は週末と法律で定められた祝日とする。
BH/VT 試験に関しても“試験開催日”にのみ受験できる。

次のパターンについては連続受験が可能：

2 日間開催の試験の場合（金曜日＋土曜日、土曜日＋日曜日など）、一日目に BH/VT を合格すれば、二日目に BH/VT 合格後に受験可能な試験（IGP-V, IGP-1, FPr, UPr, SPr, IAD, IFH-V, IFH-1, IGP-FH, IGP-ZTP, IBGH-1, Stö.Pr.1）を受験することができる。

例：

- ≫ 1 日開催の試験にて BH/VT+IGP-1 の 2 つを受験 ⇒ **できない**
- ≫ 2 日間開催の試験だが、どちらか 1 日で BH/VT+IGP-1 の 2 つを受験 ⇒ **できない**
- ≫ 金曜日に BH/VT 受験合格、土曜日に同じ試験会場で IGP-1 or FPr を受験 ⇒ **OK**
- ≫ 土曜日に BH/VT 受験合格、日曜日に他の試験会場で UPr or IAD を受験 ⇒ **OK**

b) 金曜日の試験開催

金曜日の開催は土曜日と連結して行うことが条件となる。

備考：多数の犬が土曜日に受験を申し込んだ場合にのみ、金曜日を試験日とすることができる。金曜日は 12:00 以前に試験を開始してはいけない。IGP および IFH の総審査数の上限は通常開催の半分とする（通常 36 セクション ⇒ 半分 18 セクション）。

BH/VT 試験のみの場合は最大 7 頭が受験できる。

金曜日と土曜日の組み合わせで開催される IGP/IFH 試験は、土曜日に日程終了となるようにする。しかし、いくらかの犬は金曜日に試験を終了しても構わない。

例外：土曜日に IGP-1 または IFH-1 を受験する場合“定員オーバー”とならないことを条件に金曜日に BH/VT を受験することができる。（開催日の保護、イベント許可証の発行に関しては、各国組織あるいは会員協会の規則に従う）

c) 祝日の規定

祝日に試験を実施することができる。

例外：それぞれの国の祝日の規定、あるいは各国の FCI 組織の特別規定に注意すること。

祝日の前日（平日）に（金曜日＋土曜日のように）試験をすることはできない。

試験組織／試験監督（PL）

試験開催組織は試験監督を選出する。試験監督は試験に必要なすべての事前準備を行い、試験全体を管理する。試験監督は試験規定に基づき進行を管理するとともに、試験中は常に審査員の要求に対応できるように待機する。

試験監督は試験を受験できない。他の役割を兼任してはいけない。

試験監督の責務：

- ≫ 試験開催に必要なすべての許可申請。
- ≫ 試験規定に相応しい全試験段階のための追求場所の確保。
- ≫ 試験が公正に行われるための道具や設備の準備。防衛ヘルパーのための着衣の準備。
- ≫ 追求場所の所有者との協定、および狩猟実行許可申請。
- ≫ 全種目、全段階の審査表および評価一覧表（試験報告書）の準備。
- ≫ 専門知識を備えた防衛ヘルパー、追求印跡者、服従のグループ要員などの手配。
- ≫ 受験犬の訓練手帳、血統書、ワクチン接種証明書。必要であれば責任保険の準備。

試験監督は試験日の最低 3 日前に、開催地、開始時間、会場案内図、試験種目とその段階、そして受験頭数を審査員に知らせる。この連絡がなかった場合、審査員は審査を拒否する権利を持っている。試験の開始前に開催許可証を審査員に提示する。

試験監視員

FCI 加盟の各国組織は試験を監視することができる。FCI 加盟の各国組織は専門知識を備えた試験監視員を任命することができる。試験監視員は試験が規定どおり正しく行われているかを監視する。各国組織の開催許可を得て行われる訓練試験に関しても試験監視員を派遣することができる。

訓練審査員（LR）本規定書では審査員と記載

試験・競技会には、IGP（各部門の審査資格を持つ）訓練審査員が**所轄の団体規則に従って割り当てられる**。あるいは直接要請する。または各国組織を通して要請する。FCI 世界選手権での訓練審査員は FCI 作業犬委員会が**各国組織の承認を得て決定する**。訓練審査員を何人招聘するかは主催者が決定するが、一人の訓練審査員が 1 日で審査できるのは 36 セクションを上限とする。**世界選手権やナショナルチャンピオンシップに関しては、各国組織の承認を得ればその上限を超えてもよい。**

訓練審査員は所有権のある犬、飼育犬、自己管理犬の審査はできない。共同生活をしている者が所有権を持つ犬、飼育犬、管理する犬の審査はできない。ハンドラーが共同生活者である場合も審査ができない。

訓練審査員は、自分自身が審査を務める試験・競技会に出場することはできない。

訓練審査員は、作業中の犬に影響を与えたり妨害するような行動をしてはならない。

(犬の課題実行を損なうことをしてはならない。これはすべての部門に適用される)

訓練審査員は、試験規定を厳守して試験を進行する責任がある。
指示に従わなかったり、国際作業犬試験規定に反する行動をハンドラーあるいは犬が行った場合、訓練審査員は試験を中止する権限を持っている。

出場規定

犬は試験当日に下記の年齢に達していなければならない。例外は絶対に認められない。
受験の前提条件として各国組織の規定に従いBH/VTに合格していなければならない。

BH/VTの受験可能月齢は各国組織によって設定されるが、受験時において最低12ヶ月以上でなければならない。

受験種目	受験種目	受験可能月齢	事前必要資格
IBGH-1	国際コンパニオンドッグ試験 1	15 Monate	BH/VT
IBGH-2	国際コンパニオンドッグ試験 2	15 Monate	IBGH-1
IBGH-3	国際コンパニオンドッグ試験 3	15 Monate	IBGH-2 or Obedience1 or IGP-1
IGP-V	国際作業犬基礎試験	15 Monate	BH/VT
IGP-ZTP	国際作業犬繁殖適性試験	18 Monate	BH/VT
IGP-1	国際作業犬試験 1	18 Monate	BH/VT
IGP-2	国際作業犬試験 2	19 Monate	IGP-1
IGP-3	国際作業犬試験 3	20 Monate	IGP-2
IFH-V	国際追求犬基礎試験	15 Monate	BH/VT
IFH-1	国際追求犬試験 1	18 Monate	BH/VT
IFH-2	国際追求犬試験 2	19 Monate	IFH-1
IGP-FH	国際追求犬試験	20 Monate	BH/VT
FPr 1-3	追求単課目 1~3	15 Monate	BH/VT
UPr 1-3	服従単課目 1~3	15 Monate	BH/VT
SPr 1-3	防衛単課目 1~3	18 Monate	BH/VT
GPr 1-3	作業犬試験 1~3	15 Monate	BH/VT
Stö.Pr.1	物品搜索試験 1	15 Monate	BH/VT
Stö.Pr.2	物品搜索試験 2	15 Monate	Stö.Pr. 1
Stö.Pr.3	物品搜索試験 3	15 Monate	Stö.Pr. 2
IAD	国際耐久性試験	16 Monate	BH/VT

- ・ FPr 1~3 は IGP-1~3 の規定に準じて行う「追求単課目」
- ・ UPr 1~3 は IGP-1~3 の規定に準じて行う「服従単課目」
- ・ SPr 1~3 は IGP-1~3 の規定に準じて行う「防衛単課目」
- ・ GPr 1~3 は IGP-1~3 の規定に準じて行う「服従+防衛」

防衛競技だけのイベント開催は許可されない。

これらの単課目試験は訓練資格取得の意味を持たない。(公式の資格証は発行されない)

単課目競技 (FPr 1~3・UPr 1~3・SPr 1~3・GPr 1~3) は、どのレベルからでも出場できる。(レベル 1→2→3 の順序で出場する必要はない)

例：IGP 試験・競技会に出場したことがない犬が (保有訓練資格 BH/VT のみ)、初出場となる競技会に SPr 3 で申込み ⇒ 出場可能

試験には、犬の大きさや犬種、血統に関係なくすべての犬が参加できる。

ただし、審査員は参加犬が IGP の課題を実行可能であるかを判断する責任がある。

発情中のメス犬も受験可能であるが、他の犬や参加者に接触しないように十分に注意する。そのメス犬の追求は進行予定に従い行う。服従、防衛は他の全受験犬が終了してから最後に行う。

妊娠中または授乳中のメス犬。病気または負傷している。伝染性の疾患がある。そのような犬はイベントから除外される。それらが疑わしい場合は獣医師が判断し決定する。妊娠中および授乳中のメス犬の出場制限期間については FCI または各国組織が告知する。

アンチドーピングと予防接種

所有者が出場申込みを行い、試験・競技会場に所有者あるいはハンドラーが連れてきた犬の組織、体液、および排泄物には、FCI のリストに記載されている禁止物質が一切含まれていないことが明確でなければならない。

禁止物質リストと禁止物質の試験手順、および違反があった場合の罰則は FCI 規則に掲載されている。各国組織は責任を負担することによって、その規則を拡張することができる。

犬は有効な狂犬病の予防接種が証明されなければならない。

社会的適応

犬が競技会にて (競技前、競技中、競技後) いかなるときでも、人または他の犬を咬んだ、または咬むことを試みた。あるいは攻撃した、または攻撃することを試みた場合、失格となる。犬が競技終了後に失格となった場合であっても得点はすべて取り消される。2 日間行われるイベントの 1 日目で失格となった場合、2 日目は出場できない。

犬が社会的不適応な行動を行った場合、直ちに失格となる。そのチーム (ハンドラーと失格となった犬) は、次の試験・競技会に出場するためには、もう一度 BH/VT 試験を再受験して合格しなければならない。試験・競技会日に審査員が訓練手帳に失格の理由を明確に記入し署名しなければならない。

訓練手帳への記入方法：

“社会的不適応による失格。本犬は BH/VT を再受験しなければならない。”

各種目のセクション単位（1日）

FPr 1-3, UPr 1-3, SPr 1-3	IGPのABC各単課目1～3	1セクション
GPr 1-3	作業犬試験1～3	2セクション
IBGH 1-3	国際コンパニオンドッグ試験1～3	1セクション
IFH-V	国際追求犬基礎試験	1セクション
IFH-1, IFH-2, IGP-FH	各国際追求犬試験	3セクション
Begleithundeprüfung (BH/VT)	コンパニオンドッグ試験	2セクション
IGP-Vorprüfung (V)	国際作業犬基礎試験	2セクション
IGP-Zuchtauglichkeitsprüfung (ZTP)	国際作業犬繁殖適性試験	3セクション
IGP 1-3	国際作業犬試験1～3	3セクション
Stöberprüfungen 1-3	物品捜索試験1～3	1セクション
Ausdauerprüfung	耐久性試験	1セクション

例：IGP-1（3頭）＋IGP-3（9頭）＝36セクション

FCI 各国組織が開催する大規模イベントについては、各国組織が特別な取り決めに承認することができる。

試験出場者

出場者は申込み締切日を厳守する。出場申込みを行った時点で出場料の支払いは義務となる。どのような理由であっても出場を取りやめる場合は試験監督に報告する。出場者は開催地の獣医や法律が定める動物保護法を厳守する。出場者は審査員や試験監督の指示に従う。出場者と犬はスポーツマンシップに則り出場する。特定のセクションの成績にかかわらず、出場段階のすべてのセクションを終了しなければならない。試験は成績の公表（表彰式）および訓練手帳の返還によって終了する。

試験当日には、最低4名のハンドラーが参加しなければならない。BH/VT試験受験犬が合格後に同一試験で次の段階（IGP-1, etc.）を受験する場合にのみ1日の最低参加者人数は4名を下回ってもよい。1ハンドラーは同一犬で一試験にのみ参加できる（2日間開催の試験であっても一試験とみなす）。1ハンドラーが受験（出場）できるのは最大2頭。犬は一試験で1つの訓練資格しか獲得できない。

例外：BH/VT+BH/VT合格後に受験できる次の段階。（試験開催日を参照）

受験の前提条件として、所有者とハンドラーはFCI各国組織が認定する団体に所属していなければならない。ただし、各国組織はBH/VT試験を前提条件の例外（誰でも受験できる）とすることができる。

体が不自由な試験出場者

ハンドラーに身体的な問題がある場合、そのことを試験の実施前に審査員に告げていれば、課題実行が正確に行えなかったとしても、それは考慮される。ハンドラーが身体的な理由で、自身の左側で犬をハンドリングできない場合は、右側でハンドリングすることができる。この規定は各国組織がさらに緩和することができる。

首輪の義務／リードの携帯



犬には一列の小判形チェーンカラーがゆるく装着されていなければならない。BH/VT 試験においては、革首輪、布地の首輪、あるいはハーネスも使用できる。IBH 1～3 でも、革首輪、布地の首輪は認められているが、ハーネスは認められていない。

追求作業時に、チェーンカラーに加えて、追求ハーネス（胴下装着タイプ Böttcher 含む）あるいは Kendecke（布地やナイロン製のゼッケンタイプハーネス）を装着することができる。

リードは、左肩に掛けて右腰で結ぶ、あるいはポケットに入れて常に携帯する。（競技中も）

口輪装着義務

公共の場で犬を連れて歩く場合、それぞれの国の規則を遵守しなければならない。たとえば、口輪装着が必要とされる場所で BH/VT 試験の道路における行動テストが行われる場合、犬に口輪を装着して受験する。

賠償責任

犬が引き起こした対人傷害、対物損害、および経済的損失の賠償責任はすべて犬の所有者、あるいはハンドラーにある。したがって犬の所有者あるいはハンドラーの保険加入は義務である。試験中におけるトラブル発生責任はハンドラー（所有者）にある。試験に参加するということは、たとえ審査員または主催者の指示に従った結果の事故発生であったとしても、責任はハンドラーにあるということを知っていると見なす。

予防接種

予防接種証明書を試験開始前に審査員または試験監督に提示しなければならない。

表彰式、賞品授与

表彰式は試験の種目ごとに行われる。

IGP-1, 2, 3 において、追求、服従、防衛の総合点が同点の場合は、防衛の得点が多い犬を上位とする。防衛も同点の場合は服従の得点が多い犬を上位とする。追求、服従、防衛、すべてが同点の場合は同順位とする。IGP-FH で（2回の合計が）同点の場合は、2回の追求のいずれかで他の同点犬を上回る単独の高得点を得ている犬が上位となる。2回の追求がすべて同点の場合は同順位となる。原則として全試験参加者は表彰式に参加する。試験は表彰式とそのあとの試験資料の授与によって終了する。（訓練手帳の返却など）

訓練タイトル

“インターナショナルワーキングチャンピオン”（CACIT）のタイトルはハンドラーが所属する各国組織に申請することによって FCI が認定する。

CACIT およびリザーブ CACIT が授与される競技会は、最上クラスの IGP-3 で FCI の認可を得て開催されなければならない。CACIT 授与をともなう競技会が開催される場合、FCI に加盟するすべての各国組織を招待しなければならない。

最低 2 名の審査員を招聘しなければならない。そのうちの最低 1 名は開催国以外の FCI 加盟団体の審査員でなければならない。審査員の申請により CACIT は授与される。CACIT またはリザーブ CACIT が授与されるには次の条件が必要となる。

- 当該の犬は展覧会にて最低 "Sehr Gut (SG) „ の評価を得る。
- CACIT は順位に対して授与されるものではない。当該試験(競技会)にて、最低 "Sehr Gut (SG・270 点以上) „ の評価を獲得しなければならない。
- FCI の定める犬種グループ 1、2 および 3 に属しており、作業試験 "作業犬および追求犬„ の対象となる犬種。

"ナショナルワーキングチャンピオン„ 規定は各国組織が設定することができる。

一競技会においては「一つのだけの CACIT タイトル」と「一つだけのリザーブ CACIT タイトル」を授与することができる。

訓練手帳 (スコアブック)

各試験の結果は訓練手帳、あるいは血統書に必ず記入しなければならない。

試験・競技会に出場する犬は訓練手帳が必要である。訓練手帳はハンドラーの所属する団体が規定に従って発給する。試験を受験する場合は必ず提出しなければならない。試験終了後、審査員と試験監督が記入事項を確認してから署名を行う。

訓練手帳には次の記入が必須：「有効な訓練手帳番号」、「犬の名前と種類」、「個体識別情報(イレズミ番号またはマイクロチップ番号)」、「犬の所有者の氏名と住所と会員番号」、「犬のハンドラーの氏名と会員番号(所有者とハンドラーが異なる場合)」、「セクション A (追求) の評価」、「セクション B (服従) の評価」、「セクション C (防衛) の評価」、「合計点」、「総合評価」、「TSB 評価」、「審査員の氏名と署名」

"TSB„ 評価 (全試験段階の防衛に適用)

"TSB„ 評価は繁殖活用のために、その犬の生まれ持った本質特性が "防衛„ において見極められて評価される。"TSB„ 評価は試験の成績や順位に対して与えられるのではなく、セクション C "防衛„ 終了後、審査員によって点数と評価、そして "TSB„ 評価が発表される。

"TSB„ 評価は禁足咆哮の場面から見極めが開始される。

TSB 評価：

"a„	ausgeprägt	アオスゲプレクト
"vh„	vorhanden	フォアハンデン
"ng„	nicht genügend	ニヒト ゲヌューゲント

次の 3 つの特性「意欲・自信・負荷耐力」が見極められて TSB 評価が決定される：

T riebveranlagung	トリープフェランラーグング	意欲
S elbstsicherheit	ゼルプストズィッヒャーハイト	自信
B elastbarkeit	ベラストバルカイト	負荷耐力

TSB ausgeprägt "a" 「際立っている」と評価される犬：

「大きな作業意欲」、「はっきりした意欲的行動」、「課題実行のためにひたむきに努力する」
「自信に満ちた態度」、「溢れる集中力と極めて大きな負荷耐力がある」

TSB vorhanden "vh" 「持っている（しかし満ち溢れていない）」と評価される犬：

「作業意欲が満ち溢れていない」、「意欲的行動が満ち溢れていない」
「自信が満ち溢れていない」、「集中力と負荷耐力が満ち溢れていない」

TSB nicht genügend "ng" 「不十分」と評価される犬：

「作業意欲が不足」、「本能的才能が不足」、「自信と負荷耐力が不足」

命令

本試験規定において命令に関しては提案として記載されている（これまでのように言葉の指定がないという意味）。命令は通常の話し言葉とする。同じ動作に対して命令は常に同じでなければならない。服従の招呼の場面では、呼び寄せの命令の代わりに犬の名前（のみ）を使用することができる。防衛のパトロールの場面では、呼び寄せの命令に加えて犬の名前を連結して使用することができる。パトロール以外の場面で犬の名前と命令を組み合わせて使用した場合はダブルコマンド（減点対象）となる。

各国組織は国内試験において使用する命令の規定を作成してホームページで発表することができる。ただし、いずれにしてもハンドラーは母国語で命令することができる。

国際規定／特別規定

FCI 各国組織は、自国において「許可制度」、「獣医あるいは動物保護規制」、「衛生規定」、「法律関連事項」このような事情がある場合には、一般規則の範囲を広げることができる。

IGP-V（国際作業犬基礎試験）の使用例：

1. 成犬クラス出場申し込みのための訓練資格として。
2. 各国組織は IGP-V を IGP-1 の前段階として必須とするかを独自に決定できる。

世界選手権／ヨーロッパ選手権

FCI のさまざまな世界選手権／ヨーロッパ選手権は実行規定が適用される。
実行規定の編集発行と改正は作業犬委員会の職責とする。

懲戒法

イベント実行委員長は開催会場での秩序と安全を確保する責任がある。審査員は秩序や安全が守られないイベントを中止する権限がある。あるいは主催者と協議してイベントを中止する。一般規則違反、試験規定違反、動物保護に関する違反および道徳違反があった場合、そのハンドラーはイベントから排除される。

審査員の判断は最終的かつ絶対的である。審査に関するあらゆる不服は許されない。ドッグスポーツ会場から退場させられる。さらには懲戒処分もあり得る。審査決定に影響を及ぼすことがない場合は、審査員の規則違反を異議申し立てできる。その異議申し立ては所

轄の協会／クラブに書面で提出しなければならない。イベント主催者を經由してのみ提出することができる。その書面には、申立人の署名が必要である。この異議申し立てはイベントの開催日から8日以内に提出されなければならない。異議申立書が受理されたからといって、審査員の判定の訂正が認められたわけではない。ビデオ記録は証拠として考慮されない。この規定は各国組織の懲戒規則も考慮しなければならない。

試験失格 (Disqualifikation)

試験失格となったその犬の得点は、すでに実行した課目の既得の点数も含めてすべて剥奪される。訓練手帳には評価や点数は記入されない。失格となった場合、審査講評はされない。失格時点で他の課目が未実行の場合は、その課目を行うことができない。訓練手帳には失格となった理由が記入される。

失格の理由	結果
<ul style="list-style-type: none"> » 追求にて、犬がくわえ上げた物品を放さない。 » 犬が野生動物を追いかけて再開不可能。 » 犬が試験中に（何らかの原因で）勃発し、3回の呼び戻しの命令で戻ってこない。 » 犬がハンドラーの掌握から離れる（例：側面／背面護送にて犬が3回の命令（正規の命令＋追加命令2回）後にハンドラーから離れた。あるいはハンドラーの効果的な動作でしか掌握できない。 » 防衛にて、犬が片袖以外のヘルパーの身体部分を咬んだ。（突く・押すは減点のみ） » 防衛にて、犬がヘルパー以外（審査員、試験監督、etc.）をヘルパーとみなしてターゲットにした。（接触した／方向修正できない） 	<p>試験失格 不服従によって</p>
<ul style="list-style-type: none"> » 犬が性格（虚心）テストにおいて中立ではなかった。 	<p>試験失格 虚心の欠如によって</p>
<ul style="list-style-type: none"> » ハンドラーのスポーツマンシップに欠ける行為（例：犬の意欲付けのための物品あるいはエサを所持して競技をした） » IGP 規定違反、動物愛護や道徳違反。禁止された道具を使用して不正行為を試みた（疑い）。 	<p>試験失格 スポーツマンシップの欠如によって</p>

中止 (Abbruch)

追求または服従で中止の場合、中止時点までの得点は取り消されない。中止となった課題以外の、すでに実行済みの課題の点数も取り消されない。訓練手帳には中止になるまでの点数を記入する。防衛に限っては得点なし(0)「中止」とのみ記入する(TSB評価は必要)。

中止の理由
<ul style="list-style-type: none"> ≫ 追求の出発地点において犬はスタートを3回失敗した。 ≫ 犬が追求コースからリード分(10m)以上離れた。あるいは審査員がコースから離れていく犬について行くようハンドラーに指示をしたが無視した。 ≫ 追求作業が制限時間内に完遂できなかった。 ≫ 防衛の禁足咆哮において、審査員がハンドラーに犬の後方に行くための指示を与える前に、犬がヘルパーを見放した場面で、命令を与えても犬がヘルパーのもとに行かない。あるいはヘルパーのもとに行ったが、また見放した。 ≫ 防衛課題実行中の犬がディフェンスに失敗する。 ≫ 防衛における禁足の場面で、犬のもとに行くための審査員の指示前に、あるいは犬のもとへ歩み寄っているときに、犬がヘルパーを見放しそうだったので、とどまらせるためにハンドラーが命令をした。 ≫ 防衛におけるパトロールで、ヘルパーの隠れ場所(最終テント)到達に3回失敗した(ヘルパーを発見できなかった)。

病気/負傷による中止

試験中に犬の病気が報告された場合の対処:

すでに何らかのセクションを終えたあとで、ハンドラーが犬の病気を申告した場合、試験報告書などには「病気により中止」と記録する。それまでに獲得した点数は残るが叙述(説明)はない。備考: 審査員は犬が病気あるいは負傷していると判断した場合、(もしハンドラーの意に反したとしても)審査を中止することができる。犬の年齢による体力不足で実行困難と判断した場合も動物愛護の観点から同様に処置される。記入例: 「負傷により中止、

性格(虚心)テスト

犬の性格は全試験中(表彰式を含む)において観察される。性格の問題が顕著であると判断された場合、その時点までの結果に関わらず、性格テスト不合格として犬は「試験失格」となる。試験報告書(訓練手帳を含む)には、その理由が記入されなければならない。

1. 性格テストは各試験の開始前に行われる。
2. 性格テストは中立な場所で実行されなければならない。試験会場または追求会場と密接な関係を持つ場所で行ってはならない。

3. すべての犬が個々に審査される。
4. 追求開始直前あるいは各試験の開始直前に性格テストを行ってはならない。
5. 犬にはリードが装着されていること。(短い標準的なリード。追求の用具類が装着されてはいけない) **犬は制御下でなければならない。**

性格テストを概略的に行ってはならない。どのような方法(状況)で行うかは審査員に委ねられる。しかし、それは審査員によって極端に相違するものであってはならない。審査員は偏見なく公平にスムーズに、そして安全に実行しなければならない。性格テストは通常的环境下で実施される。犬の自然な行動を観察するために、犬がいままで体験したことがない、不自然な刺激を受ける環境で行ってはならない。(試験中のどの場面でも) **審査員が欠陥を発見した場合、さらに正確な審査を行うために同じことをもう一度実行するように要求することができる。**(たとえば銃声テスト)

犬が最初の性格テストに合格していても、審査の過程において欠陥があった場合、審査員はその犬を審査から除外できる。訓練証明書には「性格/行動テスト不合格」と記入する。

BH/VT および IBGH では銃声テストは行われぬ。したがって試験において IGP 受験犬と BH/VT あるいは IBGH 受験犬がペアとなることはできない。

性格テストの合否

ポジティブな表現 = 合格 :

- 犬は自信がある
- 犬は静かである・安定している・注意力がある
- 犬は活発・注意力がある
- 犬はのびのびしている・良性である

合否のボーダーライン = さらなる観察が必要 :

- 犬は不安定だが攻撃的ではない。しかし、試験過程においてはのびのびしている。
- 少し緊張(興奮)している。しかし、課題実行中は静かである。

試験を受けることができない犬 :

- 安定せずに怖がっている。人から逃避しようとする。
- 神経質・攻撃的・警戒心が強すぎる。怖がりや咬む。
- 咬み癖がある。

個体確認 (ID チェック)

性格テストにおいて個体識別確認は必須要素である。これはイレズミ番号やマイクロチップの確認において判断される。血統書やイレズミ番号のない犬は必ずマイクロチップが挿入されていなければならない。審査員は必ず ID チェックを実行し、その結果を試験報告書に記録しなければならない。イレズミ番号がハッキリと認識できない場合、識別可能な標識を入力しなければならない。イレズミ番号はハンドラーの提示した証明書類に記載されている番号と一致しなければならない。(イレズミ番号が判読不可能など) 矛盾が生じた

場合は試験資料に記録する。国外でマイクロチップが挿入された犬を所有するハンドラーは、マイクロチップリーダーの読み取りに責任を持つ。ID チェックで同一性が明確に識別できない犬は、訓練イベントに参加することができない。審査員が犬のチップを見つけることができない場合、ハンドラーに自分で見つけるように指示をする。発見後に審査員が再確認する。審査員がチップリーダーで犬に触れることは個体確認において必須である。

銃声に対して臆病な犬 (gun-shy)

“銃声シャイの犬”は、次のような不安反応を示す。

- ハンドラーについて行こうとする、離れない
- 不安でパニックとなりその場から逃れようとするあるいは逃げる
- 不安でパニックとなり彷徨（さまよ）う

例：（休止中の犬が）銃声の際に起き上がり怯えて逃げ出す

評価するにあたって、（休止の犬が立ち上がるなど）それがトレーニングミスによって発生したのか、あるいは銃声シャイなのかを判断しなければならない。銃声シャイの疑いがある場合、審査員は再度鑑定しなければならない。犬に約 2m のリードを装着してハンドラーが保持する。そして約 15 歩の距離から審査員によって銃声テストが行われる。このときリードは弛んだ状態で犬は立っていなければならない。

評価（叙述／審査講評）

実行されたパフォーマンスは評価と点数によって審査される。評価とそれに対応する点数は、実行されたパフォーマンスの質に相応しくなければならない。

評価／点数一覧表

	Mangelhaft M 不可	Befriedigend B 可	Gut G 良	Sehr Gut SG 特良	Vorzüglich V 優
5	0~3	3,5	4	4,5	5
10	0~6,5	7~7,5	8~8,5	9~9,5	10
15	0~10	10,5~11,5	12~13	13,5~14	14,5~15
20	0~13,5	14~15,5	16~17,5	18~19	19,5~20
30	0~20,5	21~23,5	24~26,5	27~28,5	29~30
35	0~24	24,5~27,5	28~31	31,5~33	33,5~35
60	0~41,5	42~47,5	48~53,5	54~57	57,5~60
70	0~48,5	49~55,5	56~62,5	63~66,5	67~70
80	0~55,5	56~63,5	64~71,5	72~76	76,5~80
100	0~69,5	70~79,5	80~89,5	90~95,5	96~100
200	0~139,5	140~159,5	160~179,5	180~190	190,5~200
300	0~209	210~239	240~269	270~285	286~300

パーセント計算

評価				授与の場合	マイナスの場合
V	Vorzüglich	フォアツュークリッヒ	優	96%以上	-4%以下
SG	Sehr Gut	ゼーア ゲート	特良	90%~95%	-5%~-10%
G	Gut	ゲート	良	80%~89%	-11%~-20%
B	Befriedigend	ベフリディゲント	可	70%~79%	-21%~-30%
M	Mangelhaft	マンゲルハフト	不可	70%未満	-31%~-100%

各課題の点数

各セクション（追求・服従・防衛）の発表点数は小数点以下の数字を使用しない。しかし、各セクション内の各課題の採点に関しては小数点を使用できる。セクションの集計をした際に小数点以下の数字が発生した場合は、そのセクションの全体的な印象に応じて繰り上げるかまたは切り捨てる。

次の一段上のレベルを受験するには、各セクションで最低 70%以上の得点（そのセクションの満点から）を獲得して合格しなければならない。

防衛ヘルパー規定 *Helferbestimmungen*

A) セクション C “防衛、におけるヘルパーの必須条件

1. ヘルパーは IGP（国際作業犬試験規定）の方針および規則を順守して行動する。
2. 防衛ヘルパーは終日、審査員のアシスタントである。
3. 個人の安全と保険法の理由により、ヘルパーは試験と競技会のための専門教育を受けていなければならない。防衛のための用具を所有していなければならない（防衛ズボン、防衛ジャケット、防衛片袖、インナープロテクター、必要であれば手袋）。
4. ヘルパーは天候やグランドコンディションに応じて、安定して滑らないシューズを着用しなければならない。
5. セクション C “防衛、の開始前にヘルパーは審査員から指示を受ける。ヘルパーは審査員の指示に従ってその役目を果たさなければならない。
6. ヘルパーがソフトムチを受け渡す場面では、試験規定に従いハンドラーの指示どおりに行動する。側面護送および背面護送で歩き出す際、ハンドラーが犬に座れ（基本姿勢）を命令したあと、指示があるまでヘルパーは勝手に歩き出してはいけない。
7. 各団体が行う（通常の）試験は 1 名のヘルパーで開催できる。ヘルパー自身も試験に参加（受験）している場合、そのヘルパーの犬のときだけヘルパーを交代させることができる。競技会、選考会、チャンピオンシップなどでは、原則として最低 2 名のヘルパーを必要とする。ハンドラーとヘルパーが共同生活者であっても問題ない（すべての試験・競技会において）。

B) 試験においてヘルパーが成すべき行動原則

1. 全般

犬の訓練完成度とクオリティーが、試験という舞台で審査員によって評価される（たとえば、本能的素質、負荷耐力、自信、服従性）。審査員は視覚と聴覚によって客観的に評価する。したがってヘルパーは審査員が十分に満足できる仕事を実行しなければならない。そして IGP 試験はスポーツであるという特性（すべての出場者が同じ条件で受験できる）を守るために、審査員との間で取り決められた規則を厳守する。

ヘルパーは自分勝手にセクション C “防衛、を演出してはならない。

セクション C “防衛、の各課題には、審査員にとって重要な評価基準が満ちあふれている。犬の負荷耐力、自信、本能的行動、服従性など、さらに咬捕のクオリティーも評価しなければならない。たとえば、咬捕のクオリティーが審査される場面では、ヘルパーは “良い咬捕、”ができるように、犬にチャンスを与えなければならない。あるいは “負荷耐力、”が審査される場面では相応しい “負荷、”を与えなければならない。ヘルパーは最大の集中力を発揮して審査要求に十分応えられる行動をする。

2. “禁足と咆哮、”

ヘルパーはテントの中でハンドラーと犬から見えないように立つ。防衛片袖を付けた腕は軽く曲げる。“威嚇、”するような姿勢をしてはいけない。犬が “禁足と咆哮、”を行っていない

るとき、ヘルパーは犬の行動をよく観察する。犬が余計な行動をしても、瞬間的に身構えたりするなどの動作をしてはいけない。ソフトムチは体の横で下に向けて持つ。

翻訳者注記：ヘルパーの“隠れ場所”は材質や形は限定されていませんが、世界中で一般的に三角すいのテントが使用されているので本規定書では“テント”に統一しました。

3. “ヘルパーの逃走阻止”

“禁足と咆哮”の後、ハンドラーの指示でヘルパーは普通に歩いて、マーキングされた逃走の開始地点へと移動する。ヘルパーの立ち位置と犬の待機位置の距離は 5 歩でなければならない。ヘルパーは防衛片袖を装着している腕を犬の待機位置のほうに向けて立つ。どの方向に逃走するのかハンドラーが認識できるようにしなければならない。

審査員の指示でヘルパーは素早く一定方向に駆け足で逃走を開始する。そのとき大げさな、あるいは滅茶苦茶な走り方をしてはいけない。防衛片袖は犬が目標を定めて最適な咬捕ができるようにしなければならない。逃走中は犬のほうに体を振り向けてはいけないが、犬の動きは視野の中に入れる。逃走中は、防衛片袖を装着した腕を伸ばしてはいけない。犬が咬捕したあとは、防衛片袖を体に密着させるように引きつけてそのまま一定方向に走る。

ヘルパーの逃走距離は審査員が指定する。審査員の指示があれば逃走をやめて立ち止まる。ヘルパーがこの課題に相応しいダイナミックな逃走を実行すれば、審査員は最適な評価が行える。ヘルパーは犬に対するあらゆる補助行為、たとえば「咬捕の前に大げさに防衛片袖を差し出す」、「刺激するような声を出す」、「走り出す前や逃走中にソフトムチで防衛ズボンを叩く」、「咬捕後の防衛片袖の保持に緊張感がない」、「逃走の度合いが低下する」、「自分勝手に逃走を停止する」などをしてはいけない。

態度に関しては 9. を参照（すべての課題において適用される）

4. “禁足中のヘルパーによる攻撃を防御”

犬が禁足を行っている場面で、審査員の指示によりヘルパーは犬に攻撃を仕掛ける。その際、犬を叩くことなくソフトムチを犬より上に振り上げて威嚇する。その瞬間、正面から犬に向かって相応しい抵抗を加えながら前方へと駆け出すような感じで攻撃する。防衛片袖は必要以上に移動させることなく、体の前方でお腹に密着するように引きつけて構える。犬が咬捕したら、犬の腰部がソフトムチを持つ腕のほうに位置するようにして一定の方向へと負荷段階を開始する。犬が防衛片袖を捕らえるこの場面でヘルパーは回転する動作をしてはならない。犬に対する圧迫が真正面過ぎて、犬の体がよじれて押し倒されるようなアクションは避ける。攻め立てる方向はすべての犬に対して同一でなければならない。それとともに、すべての犬の評価が正しく行えるように「犬に対する攻撃行動」、「負荷段階での犬の状態」、「咬捕の状態」、「犬が放す行為と禁足状況」は審査員に見えるように実行する。ハンドラーの方向に攻め立ててはいけない。

負荷テストは、ソフトムチで犬の肩部またはキ甲部に行く。ムチによる負荷テストの強さはすべての犬に対して均一でなければならない。負荷テストは“禁足中のヘルパーによる攻撃を防御”の場面で行われる。ソフトムチによる負荷テストは負荷段階開始後、約 4～5 歩の地点で実行される。ソフトムチによる負荷テスト実行後も約 5 歩の負荷を続ける。その際、ソフトムチは威嚇のために使用する。

負荷状況持続の距離は審査員が決定する。審査員が指示したら攻撃を止めて立ち止まる。

ヘルパーが相応しいダイナミックさで攻撃を実行すれば、審査員は最適な評価が行える。ヘルパーは犬に対するあらゆる補助行為、たとえば「咬捕の前に防衛片袖を差し出す」、「咬捕の前に刺激するような声を出す」、「ソフトムチで防衛ズボンを叩く」、「咬捕後の負荷実行中における防衛片袖の保持に緊張感がない」、「異なる強さの負荷行動やムチによる負荷テスト」、「負荷耐力の不足する犬に対して自分勝手に停止する」などは許されない。

態度に関しては9.を参照（すべての課題において適用される）

5. “背面護送、（IGP-2, 3）

ハンドラーの要求（指示）があってから始まる約30歩の背面護送は普通の歩度で歩く。その方向と距離は審査員が指定する。護送中、ヘルパーは犬に刺激を与えるような仕草をしてはならない。ソフトムチと防衛片袖の保持位置は犬に余計な刺激を与えないようにする。特にソフトムチは犬から見えないようにする。すべての犬に対して同一の歩調で歩く。

6. “IGP-2 背面護送の終わり方、

約30歩の背面護送のあと、審査員の指示でヘルパーは停止する。ハンドラーはヘルパーに近づきソフトムチを取り上げる。犬は基本姿勢で座る。その後、審査員のもとまで側面護送を行う。

7. “背面護送中にヘルパーが奇襲、（IGP-3）

背面護送中の奇襲は審査員の指示によって実行する。ダイナミックに左回転あるいは右回転で振り返り、犬に向かって圧力に満ちた奇襲を実行する。ソフトムチは犬より上に振り上げて威嚇する。犬は静止することのないヘルパーの、防衛片袖の柔軟な部分（正確な咬捕部分）を捕らえなければならない。ヘルパーは犬を受け入れる瞬間、犬の力量衝撃をうまくキャッチするために必要に応じて、体を回転させる。防衛片袖を必要以上に動かすことは避ける。犬が咬捕したら、犬の腰部がソフトムチを持つ腕のほうに位置するようにして一定の方向へと負荷段階を開始する。犬に対する圧迫が真正面過ぎて、犬の体がよじれて押し倒されるようなアクションは避ける。攻め立てる方向はすべての犬に対して同一でなければならない。それとともに、すべての犬の評価が正しく行えるように「犬に対する攻撃行動」、「負荷段階での犬の状態」、「咬捕の状態」、「犬が放す行為と禁足状況」は審査員に見えるように実行する。ハンドラーの方向に攻め立ててはいけない。

負荷状況持続の距離は審査員が決定する。審査員が指示したら負荷行動を止めて立ち止まる。ヘルパーが相応しいダイナミックさで攻撃を実行すれば、審査員は最適な評価が行える。ヘルパーは犬に対するあらゆる補助行為、たとえば「犬が咬捕をする前に横に逸れすぎる」、「咬捕の前に防衛片袖を差し出す」、「奇襲の際に刺激するような声を出す」、「ソフトムチで防衛ズボンを叩く」、「咬捕後の負荷実行中における防衛片袖の保持に緊張感がない」、「異なる強さの負荷行動」、「負荷耐力の不足する犬に対して自分勝手に停止する」などをしてはいけない。

態度に関しては9.を参照（すべての課題において適用される）

8. “ヘルパーの遠距離攻撃阻止、

IGP-1 : 30m IGP-2 : 40m IGP-3 : 50m

IGP-1/IGP-2 : ヘルパーは第一パートが終了した地点にとどまる。
ハンドラーと犬は「ヘルパーの遠距離攻撃阻止の発進待機位置」に行くように指示される。

IGP-3 : 審査員の指示でヘルパーはテントから出て駆け足で中央ラインへと向かう。中央ライン上に達したヘルパーは止まることなく方向変換して、ハンドラーと犬のほうへ駆け足で向かって行く。その際、ソフトムチを振りかざして大声を上げて威嚇する。

犬は状況に応じて防衛片袖の正確な咬補部分を捕らえなければならない。ヘルパーは犬を受け入れる瞬間、犬の力量衝撃をうまくキャッチするために“必要に応じて、体を回転させる。犬を突き倒すような受け止め方をしてはならない。犬が咬捕したら、犬の腰部がソフトムチを持つ腕のほうに位置するようにして一定の方向へと負荷段階を開始する。犬に対する圧迫が真正面過ぎて、犬の体がよじれて押し倒されるようなアクションは避ける。攻め立てる方向はすべての犬に対して同一でなければならない。それとともに、すべての犬の評価が正しく行えるように「犬に対する攻撃行動」、「負荷段階での犬の状態」、「咬捕の状態」、「犬の放す行為と禁足状況」は審査員に見えるように実行する。ハンドラーの方向に攻め立ててはいけない。

負荷状況持続の距離は審査員が決定する。審査員が指示したら負荷行動を止めて立ち止まる。ヘルパーが相応しいダイナミックさで攻撃を実行すれば、審査員は最適な評価が行える。ヘルパーは犬に対するあらゆる補助行為、たとえば「攻撃度合いの減少」、「立ち止まって受け止める」、「犬が咬捕をする前に横に逸れすぎる」、「犬を突き倒すような受け止め」、「咬捕の前に防衛片袖を差し出す」、「咬捕後の負荷実行中における防衛片袖の保持に緊張感がない」、「異なる強さの負荷行動」、「負荷耐力の不足する犬に対して自分勝手に停止する」などは許されない。

態度に関しては 9. を参照（すべての課題において適用される）

9. “ヘルパーの態度、（すべての課題において適用される）

犬の「咬捕状態」「防衛片袖を放す行為」「禁足状況」これらすべての課題は審査員が観察できるように実行する（審査員に背を向けて立たない。審査員とのアイコンタクトは常に保持する）。攻め立て行動からの停止は、犬に対する運動と刺激を徐々に減少させて止まるが、防衛片袖を装着した腕の緊張感を抜いてはいけない。防衛片袖を急に引き上げるようなことはせずに、それまでの運動状態の位置のまま固定する。振り上げていたソフトムチは犬に見えないように体の横で下に向けて保持する。犬が咬捕を放すときには、いかなる補助もしてはいけない。咬捕を放したあとの犬とアイコンタクトをとったり、刺激を与えるような態度はすべて許されない。禁足中の犬がヘルパーの周りを回る行動をしたときは、突然動いて犬を刺激することのないように、ゆっくりと犬のほうに向きを変える。

10. “不安定または拒否する犬への対処、

防御課題の実行中に犬が咬捕しなかった、あるいはヘルパーの負荷に耐えられずに放してしまった場合、審査員が中止を指示をするまで止まることなく攻め立てを続行する。このような状況のときに補助行為をしたり、自分勝手に止まったりしてはいけない。犬が咬補を放さなければならない場面で、犬が放す気にならないような身のこなし「（引張られて）犬に負けてしまう」ことは許されない。あるいは咬捕を放さない犬に対してソフトムチを使用することは許されない。犬がヘルパーを見放して離れそうになったとき、何らかの刺激を与えてとどまらせるようなことをしてはいけない。ヘルパーは試験規定を厳守して各課題の実行を積極的かつ公平に遂行しなければならない。禁足中に犬が突いたり咬みついたりしても防御行動をしてはいけない。

BH/VT

Begleithundeprüfung mit Verkehrssicherheitsteil コンパニオンドッグ試験+道路での安全性確認

すべてのハンドラーは各国組織の規則に準じた専門知識試験の合格証明を提出しなければならない。あるいは犬の専門知識者であるという公的に発行された証明書を提示しなければならない。コンパニオンドッグ試験はすべての犬種、そしていかなる大きさの犬でも受験することができる。受験可能月齢は各国組織によって定めることができる。ただし、最低12ヶ月以上でなければならない。

犬が、A 部門「普段の練習場での服従テスト」において 70% (42 点) 以上を獲得できなかった場合、B 部門「道路におけるテスト」は行うことができない。審査結果の講評時に点数は発表されず「合格、あるいは「不合格、が審査員によって発表される。試験で合格となるには A 部門「服従テスト」において 70% (42 点) 以上得点して、B 部門「道路での行動テスト」において審査員から「ausreichend/十分」と評価されなければならない。主催者が表彰式のために BH 試験出場者の順位付け (点数発表) を要請すれば、審査員はそれに応じることができる。

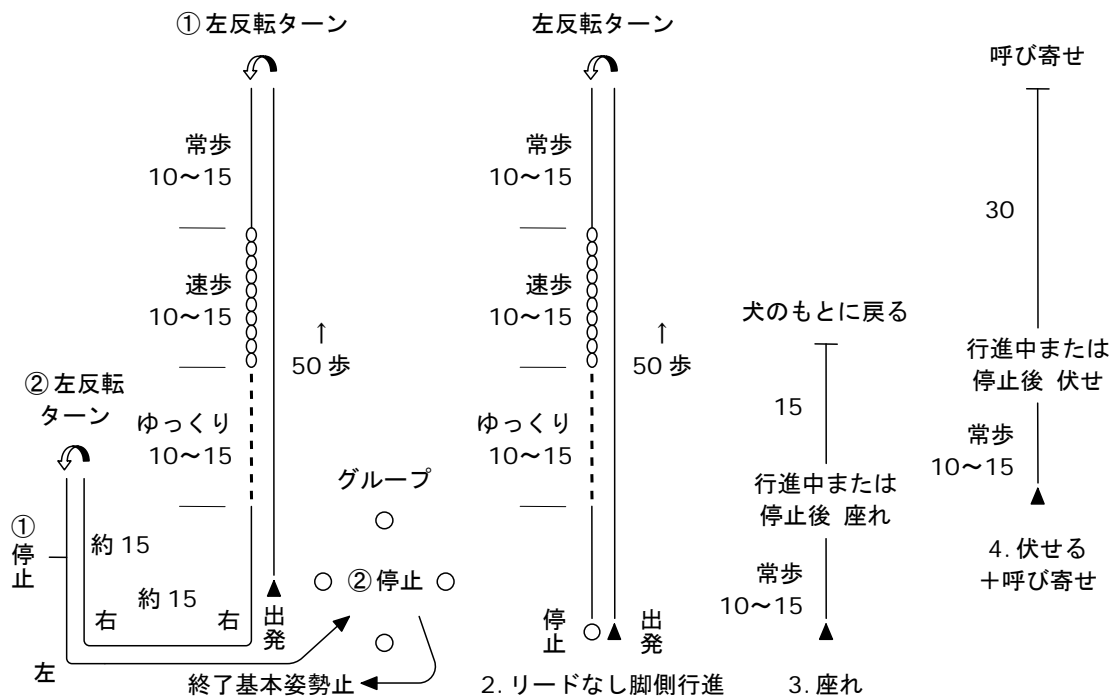
BH/VT は本試験規定におけるすべての試験の前提条件である。再受験のために間隔を設ける必要はない。ただし、2 日間開催の試験の場合は、1 日だけしか受験できない。試験結果は合否にかかわらず、必ず訓練証明書に記入しなければならない。

BH コンパニオンドッグ試験 (服従) Begleithundeprüfung

BH/VT 試験では銃声テストを行わない。実施要領は一般規定の説明に従って行う。

3. 「座る」と 4. 「伏せる+呼び寄せ」の実施要領は BH/VT 特別規定を参照すること。

BH 課題 1~4 実施要領図



1. リード付き脚側行進	15 点
2. ノーリード脚側行進	15 点
3. 座る (BH/VT 特別規定参照)	10 点
4. 伏せる+呼び寄せ (BH/VT 特別規定参照)	10 点
5. 状況下での休止	10 点

BH/VT 特別規定：

1. 「リード付き脚側行進」 実施要領図のとおりに行う。(従来どおり)

2. 「ノーリード脚側行進」 大幅に変更された：

「基本姿勢」⇒「常歩 50 歩」⇒「左反転ターン」⇒「常歩 10～15 歩」⇒「速歩 10～15 歩」
⇒「ゆっくり 10～15 歩」⇒「常歩 10～15 歩」⇒「停止・指示なし停座 (終了基本姿勢)」

3. 「座る」 二通りの実行方法自由選択 (方法①は IGP と同じ)

- ①脚側行進中の 10～15 歩の間でハンドラーは止まることなく犬に座れを命令する。
- ②脚側行進中の 10～15 歩の間でハンドラーは停止する。犬は素早く指示なし停座を行う→座れの命令を与えて犬から離れる。「停止時に犬が命令なしで停座を行うことが条件」(離れたあとの要領は同じ)

4. 「伏せる+呼び寄せ」 二通りの実行方法自由選択 (方法①は IGP と同じ)

- ①脚側行進中の 10～15 歩の間でハンドラーは止まることなく犬に伏せを命令する。
- ②脚側行進中の 10～15 歩の間でハンドラーは停止する。犬は素早く指示なし停座を行う→伏せを命じる→伏せたら追加の命令 (マテ) なしで離れる。「停止時に犬が命令なしで停座を行うことが条件」(離れたあとの要領は同じ)

5. 「状況下での休止」 最低 30 歩離れて犬に背中を向けて立つ。(隠れない)

VT 道路での安全性確認 Verkehrssicherheitsteil

【全般】

道路での行動テストは、試験 (服従) 会場以外の、課題実行に適した環境の市街地で行われる。一般道路 (通り、道、あるいは場所) のどこで、どのように実行するかは審査員と試験監督が決定する。実施の際には公共交通機関の妨げにならないように注意する。

試験の性質上、この課題実行はかなりの時間を必要とします。しかし、たとえば犬の数が多からといって、うわべだけの課題要求 (手抜き) となってはいけない。

B 部門での各課題の審査は点数制ではない。B 部門で合格となるには道路や公共の場における全体的な犬の行動の印象が決定的な要素となる。

本規定書における実施要領は一例である。審査員はそのときどきの地域の状況に応じて課題の実施方法を変更することができる。審査員は行動に疑問のある犬にもう一度同じ課題を実行するように要求したり、あるいは課題を変化させて実行させることができる。

【試験課題】（以下の課題は必要最低限なものであり各国組織は拡張することができる）

1. 人のグループに遭遇したときの犬の態度

審査員の指示でハンドラーとリード付きの犬は指定された道路の歩道部分を歩く。審査員はチーム（ハンドラーと犬）から適当な距離を保って歩く。

犬はハンドラーの左側で、肩甲骨とハンドラーの膝が並行する位置で素直に歩く。リードはピンと張らずに少し緩めて保持される。

犬は歩行者や交通に対して無関心でなければならない。

通行人とすれ違ったり、追い越されたり、横切られたりしても、犬は中立で無関心でなければならない。（通行人役をあらかじめ準備してもよい）

ハンドラーと犬はさらに進み、くつろいだ雰囲気の人たち（最低 6 人以上）と出会い、ハンドラーはその中の一人と握手をして挨拶をして立ち話をする。ハンドラーの指示で犬は座る、あるいは伏せる。この短い会話の間、犬は静かな態度でなければならない。

2. 自転車に遭遇したときの犬の態度

ハンドラーとリード付きの犬が道を歩いていると、後ろから自転車がベルを鳴らしながら追い越していく。その自転車は大きく離れたあと U ターンをして、再びベルを鳴らしてハンドラーと犬に向かってくる。すれ違う際、自転車とハンドラーの間に犬が位置するように実行する。

犬は自転車に対してとらわれることのない態度を示さなければならない。

3. 自動車に遭遇したときの犬の態度

ハンドラーとリード付きの犬は、停車中の数台の自動車の横を歩く。その時、ある一台の車がエンジンをスタートさせる。さらに他の一台はドアを閉める。さらに歩いていると、走行中の一台の車が横で停車し、ドライバーがウインドウを開けてハンドラーに道を尋ねる。犬はハンドラーの指示で座る、あるいは伏せる。

犬は自動車音や交通音に対して無関心で静かな態度を示さなければならない。

4. ジョギングまたはインラインスケートをする人に遭遇したときの犬の態度

ハンドラーとリード付きの犬が静かな道を歩いていると、最低 2 名のジョガーがスピードを落とすことなく追い越して行く。そのジョガーは追い越したあと、U ターンをして再びスピードを落とさずに犬の横を走ってすれ違う。

ジョガーに追い越されるときとすれ違うとき、犬は正確な脚側行進をする必要はないが、ジョガーにからむような行動をしてはいけない。

ハンドラーは事なくジョガーをやり過ごすために、犬に座れまたは伏せを命じてもよい。

まったく同じ要領で 2 名のジョガーを 2 名のインラインスケーターに変更してもよい。

5. 他の犬に遭遇したときの犬の態度

他の犬に追い越されたり、すれ違ったときに中立な態度を示さなければならない。
ハンドラーは事なく他の犬をやり過ごすために、犬に「脚側行進の命令」を繰り返し与えたり、座らせたり伏せさせたりしてもよい。

6. 道で繋がれて少し待たされたときの犬の態度、他の動物に対する犬の態度

審査員の指示でハンドラーとリード付きの犬は少し賑やかな通りの歩道を歩く。少し歩いたあと、審査員の指示でフェンス、壁に固定されたリング、あるいは柱などにリードを掛けるまたは結ぶ。

ハンドラーは犬から見えないようにお店や建物の中に入る。

待たされている犬は立っていても座っても、あるいは伏せてもかまわない。

ハンドラーがいないとき、通行人がリードを付けた犬とともに試験中の犬の前を（約 5 歩離れて）横切る。（通行人役をあらかじめ準備してもよい）

ハンドラーが戻るまで、犬は静かに待っていなければならない。他の動物が前を通り過ぎる際に攻撃的な態度（喧嘩を仕掛ける）をしてはならない。繋がれたリードを強く引っ張る、あるいは吠え続けたりしてはならない。審査員の指示でハンドラーは犬のところに戻る。

備考：

あらかじめ予定していた場所で全受験犬の全審査を完了させるか、あるいは全受験犬がいくつかの課題を終えたあとに、場所を移動して審査を行うかは審査員の判断に委ねられている。

A 追求作業 *Fährtenarbeit*

一般規定

物品の大きさはすべての試験において：長 10cm 幅 2～3cm 高 0,5～1cm

	IGP-V	IGP-ZTP
印跡／物品準備	ハンドラー	ハンドラー
最低距離	200 歩	300 歩
直線コース	2	3
コーナー数	1 (直角)	2 (すべて直角)
印跡後待機時間	印跡終了後直ちに開始	20 分
制限時間	10 分	15 分
配点	追求：79P 物品：11P+10P	追求：79P 物品：7P+7P+7P
事前必要資格	BH/VT	BH/VT

	IGP-1	IGP-2	IGP-3
印跡／物品準備	ハンドラー	他人	他人
最低距離	300 歩	400 歩	600 歩
直線コース	3	3	5
コーナー数	2 (すべて直角)	2 (すべて直角)	4 (すべて直角)
コーナーの間隔	最低 50 歩	最低 50 歩	最低 50 歩
物品数／配点	3 個 7P+7P+7P	3 個 7P+7P+7P	3 個 7P+7P+7P
物品配置	①第一コース ②第二コース ③最終地点	①第一コース ②第二コース ③最終地点	①出発点から最低 100 歩離れた第一 or 第二コース②審査員 が指示③最終地点
印跡後待機時間	20 分	30 分	60 分
制限時間	15 分	15 分	20 分
事前必要資格	BH/VT	IGP-1	IGP-2

	IFH-V	IFH-1	IFH-2	IGP-FH
印跡／物品準備	ハンドラー	他人	他人	他人
最低距離	600 歩	1200 歩	1800 歩	1800 歩 試験は 2 日間 場所と印跡者を変えて 2 回実施
直線コース	5	7	8 (直線×7)	8 (直線×7)
特殊コース	-----	-----	半径 30m の半円・一カ所	半径 30m の半円・一カ所
コーナー数	4 (直角×3)	6 (すべて直角)	7	7
特殊コーナー	最終コーナーは鋭角	-----	30-60 度の鋭角・最低 2 カ所	30-60 度の鋭角・最低 2 カ所
コーナーの間隔	最低 50 歩	最低 50 歩	最低 50 歩	最低 50 歩
物品数／配点	3 個 7P×3	4 個 5P×3+6P×1	7 個 3P×7	7 個 3P×7
物品配置	①出発点から最低 100 歩離れた第一または第二コース②第二または第三コース③最終地点	①出発点から最低 100 歩②～③追求図面参照④最終地点	①出発点から最低 100 歩②～⑥追求図面参照 (一コース上に 2 個配置も可能) ⑦最終地点	①出発点から最低 100 歩②～⑥追求図面参照 (一コース上に 2 個配置も可能) ⑦最終地点
印跡後待機時間	90 分	120 分	180 分	180 分
制限時間	20 分	30 分	45 分	45 分
誘惑	-----	スタートの 30 分前に印跡	スタートの 30 分前に印跡	スタートの 30 分前に印跡
事前必要資格	BH/VT	BH/VT	IFH-1	IFH-2 or BH/VT

誘惑に関して：IFH-1, IFH-2, IGP-FH のみ

誘惑コースはコーナーの前後 40 歩以内に印跡してはいけない。第一コースと最終コースに誘惑を印跡してはいけない。誘惑は二つのコース（二カ所）に交差するように印跡するが交差角度は 60 度以上でなければならない。コースから外れないのであれば、犬が誘惑を見たりチェックをすることは問題ない。犬が誘惑コースに追求リード分（10m）進んでしまった場合、追求作業は中止される。

特別規定：IFH-2, IGP-FH のみ

ハンドラーは、自身あるいは犬の身体状態、または気象条件（たとえば高温）のために短

い休憩が必要だと判断した場合、審査員と協議の上、追求作業を一時中断することができる。ただし、その休憩は追求作業制限時間を使用して行われる。ハンドラーは休憩中あるいは物品発見時に犬の頭、目、鼻をきれいにするができる。そのために、ハンドラーは、濡れタオルまたはスポンジを携帯することができるが、追求開始前に審査員に提示しなければならない。犬に対するさらなる支援はできない。

追求会場条件

追求作業は自然のあらゆる地表条件で行われる。たとえば、草地、耕作地、森林地帯。すべての試験段階においてさまざまな条件の追求会場が使用可能である。草地から地表が土に変わる、あるいは(自然の)道を横断するなど。

印跡

追求コースは担当審査員または追求現場監督が追求会場の地形を考慮して決定する。IFH-1, IFH-2, IGP-FHでは、印跡者は審査員または追求現場監督から地形の特徴(木、電柱、家、etc.)が含まれた会場図面を受け取る。それをもとに審査員あるいは追求現場監督が印跡者に印跡手順を指示する。

追求コースはさまざまなパターンを準備する。たとえば「コーナーから物品までの距離がいつも同じ」など、そのような印跡をしてはいけない。出発地点の左側に、はっきりとした目印を地面に差し立てなければならない。印跡者は出発点にしばらく立ち止まってから、通常の歩き方で指示された方向に歩き出す。印跡は自然な歩行で行う。コーナーも通常の歩き方で印跡する。ただし、次のコースへの進入がスムーズに行えるように注意する。コーナー手前の足跡とコーナー後の一歩目が連結するようにする。(追求の印跡要領図参照)

全過程で、印跡者は不自然な歩行をしてはいけない。引っ掻いて歩いたり、中断したりせずに印跡する。物品をコーナーの前後 20 歩以内に配置してはいけない。物品は印跡上に置く。最後の物品を配置したあとも、印跡者は最低 10 歩同じ方向に進まなければならない。

犬とハンドラーは印跡の様子を見てはいけない。見えないところで待機する。印跡後、審査員のもとで出場順番が抽選によって決められる。

追求物品

物品の色は地面と極端に違ってはいけない。印跡者が最低 30 分所持していた物品が使用される。一つの追求コースに配置される物品の材質は、それぞれ異なっていなければならない(例:革、織物、木材)。選考競技会あるいは IFH 試験では物品に番号を書く。その番号は追求コース番号と一致していなければならない。

印跡前に「IGP-V, IGP-ZTP, IGP-1, IFH-V」はハンドラーが、「IGP-2, IGP-3, IFH-1, IFH-2, IGP-FH」は印跡者が物品を審査員または追求現場監督に提示しなければならない。

物品発見時の表示：指示

指示は「座る」「伏せる」または「立止」で行うことができる(指示の姿勢が物品ごとに変っても問題ない)。指示はハンドラーの補助を受けることなく説得力がなければならない。犬が物品に対して指示を行ったら(審査員の指示なしで)ハンドラーは追求リードを手から放して、あるいは置いて犬のもとに行き物品を持ち上げて審査員に示す。ハンドラーは、この動作を犬の右側で、あるいは左側でも行うことができる。ただし、再スタートの際に

その位置を変えることはできない。犬は進行方向に向かって真っ直ぐに指示しなければならない。少し斜めに「伏せる」「座る」「立つ」ことは減点とならない。指示したときに物品は犬の目の前、あるいは両前足の間に位置する。犬は再スタートまで指示した位置で落ち着いて待つ。ハンドラーの強い補助により発見された物品は通過（未発見）とみなされる。物品を審査員に示してから、追求開始の命令で再スタートを行う。

物品発見時の表示：くわえ上げる／持ってくる

物品の表示は「くわえ上げる」を選択することもできる。くわえ上げたあと、犬はそのまま「立ち止まる」または「座る」あるいは「ハンドラーのもとに持ってくる」。くわえ上げたあと、犬が伏せた、または、くわえ上げたあとも進んだ場合、それらの行為は減点となる。犬がくわえ上げた物品を持ってくる場合、ハンドラーは動いてはいけない。再スタートは、ハンドラーが物品を受け取った地点から開始する。

犬が（配置されているはずの）物品を発見できず、さらにその物品を印跡者が発見できなかった場合、減点は行われない。複数の未発見物品が回収できない場合は、やり直しの新しい追求コースが提供される。ハンドラーがやり直しを辞退した場合、物品は未発見として減点される。この規則はハンドラーが印跡者である試験（IGP-V, IGP-ZTP, IGP-1, IFH-V）においては適用されない。未発見の物品に対してポイントは与えられない。

追求リード

犬に 10m の追求リードを装着することができる。審査員による、リードの長さ、首輪、追求用具のチェックは追求作業の開始前（遅くとも申告時）に行わなければならない。巻き取り式のリードは使用できない。追求リードは、ゆとりがある（小さすぎない）一列の小判形チェーンカラーに締め状態にならないように装着する。追求リードは、犬の背中、側面、あるいは前足の間または後ろ足の間を通してよい。あるいは追加のストラップなしでハーネスまたは胴下装着タイプの Böttcher に装着する。

Böttcher を使用する場合、追求リード取り付け部分（犬の胴を一周する輪）が犬の最後の肋骨よりも後ろの腹部に達しないように注意する。

追求作業中、リードをたるませて保持していることにより、リードが地面に接触することは問題とならない。しかし、故意に大きくたるませて犬との間隔を短くしてはいけない。

使用可能ハーネス



革紐ハーネス



Böttcher



Kenndecke ハーネス

ノーリードで追求

ノーリードで追求する場合も犬との間隔は最低 10m 保つ。

開始前の申告／終了報告

ハンドラーは、呼ばれるまでに追求リードをほどいておく。そしてハーネス使用の場合は犬に装着しておく。ハンドラーは呼ばれたら、犬とともに審査員のもとに行き基本姿勢で申告をする。その際、犬は物品発見時に「指示する」または「くわえ上げる」どちらの動作をするのかを申告する。出発点の約2m手前まで短い普通のリードを付けていてもよい。ハンドラーは作業の開始前、追求開始を命じるとき、全追求作業中、あらゆる強制を犬にしてはならない。申告後、審査員の指示で出発点に向かう。出発エリアの約2m手前で犬を短時間座らせてもよい。遅くともその時点でハンドラーは追求リードを好みの位置にセットする（追求リードをハーネスに付ける／リードを前足あるいは後ろ足の間に通す）。

追求作業終了後、犬が発見した物品を審査員に提示する。最終物品を審査員に示したあと、終了報告をする前、あるいは審査結果講評前に犬と遊んだりエサを与えたりしてはいけない。終了報告は基本姿勢で行う。そのあと、短い普通のリードに付け替える。

スタート／追求態度

スタートはハンドラーの“追求開始の命令”によって実行されなければならない。スタートの試みは最大3回行うことができる。2回目、3回目を行ったことによる失敗は第一コースの評価から減点される。犬は深い鼻使いで足跡を嗅ぎ取り、出発後も犬は「意欲」「深い鼻使い」「高い集中力」を持続して安定したテンポで追求コースを進まなければならない。犬の作業に説得力があり集中力があるならば追求の速度は（審査の）判断基準とならない。物品発見後の再スタートもハンドラーの“追求開始の命令”によって実行されなければならない。スタート時にハンドラーはリードにゆとりを作らなければならない。審査員は、犬が出発点でどれだけの時間、嗅ぎ取りに執着するかでスタートの成否を判断するのではなく、むしろ、第一コースの開始部分における犬の集中力で判断しなければならない。

犬に追求リードが絡まって追求続行が非常に困難になった場合、審査員の許可を得てからハンドラーはリードの端を持ったまま犬に伏せを命令する。絡まったリードをほどいたら、ハンドラーはリードの端の位置から追求再開を犬に命令する。この行為に対して減点されることはない。

特別規定：IFH-1, IFH-2, IGP-FHのみ

ハンドラーは、犬が出発点における嗅ぎ取りに失敗して正しい追求コースに進んでいないと感じたとき、自己判断で犬を呼び寄せてスタートをやり直すことができる。ただし、それは一回に限り許される。この行為は-4点となる。ハンドラーがすでに追求コースに入ってしまった場合は、やり直しはできない。

コーナー

コーナーにおいても犬は確実に足跡を追わなければならない。コーナーでの旋回は誤りである。説得力があり足跡上から犬の体が離れなければ評価に影響しない。コーナーを通過したあとも犬は高い集中力を持続して同じテンポで進まなければならない。コーナー周辺においてもハンドラーは犬との正しい間隔を保持しなければならない。

犬がコーナーを通過して明らかに次のコースに進入したあとであればハンドラーはコース上を進まずにコーナーの外側を進んでもよい。

犬を褒める

IGP-3, IFH-1, IFH-2, IGP-FH 以外のすべての試験レベルでは、追求中の犬をときどき褒めることができる。ただし、コーナー周辺では褒めてはいけない。

すべての試験レベルにおいて、物品発見時には犬を短く褒めることができる。ただし、物品を拾い上げる前、あるいは審査員に示したあとのどちらか一度のみ許される。

追求中止／失格

追求コースから逸脱する犬をハンドラーが引き止めようとした場合、審査員は犬に追従するようにハンドラーに指示する。その指示にハンドラーが従わなかった場合、審査員によって追求作業は中止される。各試験に設けられた制限時間内に追求最終地点に到達できなかった場合、審査員によって追求作業は中止される。注：ただし、IFH-1, IFH-2, IGP-FH においては、制限時間となったときに犬が最終コース上におれば、このルールは適用されない。犬が長い時間、同じ場所にとどまって捜そうとしない場合は、追求コース上にいたとしても、あるいは制限時間内であっても追求は中止される。

追求中、野生動物の出現により、犬が狩猟本能行動を示したときに、ハンドラーは犬に対して「伏せ、」を命令することができる。犬がそれに従った場合は審査員の指示で犬を呼び寄せて追求作業を再開する。この際、追求開始の命令を与えてもよい。この再開手順を実行できなかった場合、犬は失格となる。評価：不服従のために試験失格

評価基準／審査員の任務

それぞれのコースは、長さ、地表条件、気象条件が考慮されて評価される。審査員は犬の追求作業に影響を与えないように立ち位置に注意する。犬の搜索範囲（ハンドラーを基点に半径 10m および犬の進行方向 10m）は、審査員および印跡者は邪魔をしてはいけない。

審査員は犬だけを、あるいはハンドラーだけを見るのではなく「地表条件」、「天候」、「誘惑の可能性となるもの」、「時間的要因」を観察しなければならない。それらすべての要因を考慮しなければならない。評価は全体的な要素に基づいて行わなければならない。

評価は次の基準を考慮して行わなければならない。

- 追求態度（例：強く一定した意欲的な行動、コーナーの前後、物品発見の前後）
- 訓練クオリティー（例：落ち着きのないスタート、意気消沈、逃避的）
- ハンドラーによる補助行為
- 追求作業における困難条件：
 - 地表条件（植生、砂、地表条件の変化、肥料）
 - 風の状態
 - けもの道
 - 天候（暑さ、寒さ、雨、雪）
 - 天候の変化

審査員は、犬の作業に対する「意欲」、「確実または不確実」、「変動」を見極めて評価しな

ければならない。

追求での評価の切り下げ（すべての試験で共通）

- » 犬が追求作業を中断した場面において、ハンドラーが「犬のもとに行かずに」追求リードの端の位置から追求再開のために「Such／サガセ」を命令した ⇒ -2 点
(IFH-2, IGP-FH -1 点)
- » 犬が追求作業を中断した場面において、ハンドラーが「犬のもとで」追求再開のために「Such／サガセ」を命令した ⇒ -4 点
(IFH-2, IGP-FH -2 点)
- » 「混乱」、「排泄行為」、「コーナーでの旋回」、「ハンドラーが絶え間なく励ます」、「追求中あるいは物品に対してのリードまたは声による補助行為」

B 服従 *Unterordnung*

一般規定

基本的要件

≫ 表現力豊かな行動

- 自信
- 喜び、意欲的な作業
- 集中力／注意力
- 犬とハンドラーの調和

≫ 技術的な正確さ

- ポジション
- 反応／遂行

審査員は服従が開始される前に設置用具が IGP 規定に準じた仕様であるかを確認しなければならない。用具が IGP 規定に準じていない場合、使用することはできない。

各課題を評価するにあたっては、開始時の基本姿勢から完了（終了基本姿勢）まで注意深く犬の行動を観察しなければならない。

命令 (HZ)

各課題において、犬に 3 回目の命令を与えても完了できない場合、その課題は中止されて評価なし（0 点）となる。（注：例外のパターンあり）

呼び寄せの命令は犬の名前を使用することができる。犬の名前に加えて何らかの命令を行った場合はダブルコマンドと見なされる。

ハンドラーの命令に対する犬の反応：

犬はハンドラーの命令で課題を喜んで実行しなければならない。犬の各行動に不安やストレスがあった場合は課題評価が下がる。

追加の命令

2 回の追加命令（計 3 回）を与えても、犬が課題を実行できなかった場合、その課題は 0 点となる。2 回の追加命令（計 3 回）を与えたが、犬が “課題の一部” を実行しなかった場合、その課題の評価は「高い “Mangelhaft／不可、65%” となる。

1 回の追加命令（合計 2 回の命令）⇒ 課題の区分評価が “B／可” となる

2 回の追加命令（合計 3 回の命令）⇒ 課題の区分評価が “M／不可” となる

例：伏せ＋招呼

基本姿勢・脚側行進・伏せ（区分評価 5 点）＋招呼・正面停座・終了基本姿勢（区分評価 5 点）

例：前進＋伏せ

基本姿勢・脚側行進・前進（区分評価 5 点）＋伏せ・待つ・終了基本姿勢（区分評価 5 点）

犬に正面停座から基本姿勢に移る命令を与えたが動かない。 追加の命令 1 回目（合計 2 回目）で犬は基本姿勢へと素早く移動した。	区分評価 "B/可、-1,5 点 他に失敗がなければこの課題の総合評価は G/8,5 点となる
前進中の犬が伏せの命令で直ちに止まったが伏せずに立止。追加の命令 1 回目（合計 2 回目）で犬は座った。追加の命令 2 回目（合計 3 回目）で犬は素早く伏せた。	区分評価 "M/不可、-2,5 点 他に失敗がなければこの課題の総合評価は B/7,5 点となる

翻訳者注記：このケースにおいて合計 3 回目の命令でも実行しなかった場合、区分評価は -3,5 点となり課題の総合評価は「高い "Mangelhaft/不可、6,5 点」となる。

3 回目の命令で実行できなかった課題は 0 点となる規則はこのケースでは適用されない。ただし、前進に関しては 3 回の命令を無視して止まらなかった場合、課題は 0 点となる。

犬が命令なし（命令前）で課題を開始した場合、区分評価が "M/不可、となる。

各試験の課題に対する点数配分

課題	IGP-V	IGP-ZTP
リード付き脚側行進	30 点	25 点
ノーリード脚側行進	20 点	-----
行進中の座れ	-----	15 点
行進中の伏せと招呼	15 点	20 点
ダンベル持来	15 点	20 点
障害飛越（80cm）	10 点	10 点
状況下での休止	10 点	10 点
合計	100 点	100 点

課題	IGP-1	IGP-2	IGP-3
ノーリード脚側行進	15 点	15 点	15 点
常歩行進中の座れ	10 点	10 点	5 点
行進中の伏せと招呼	10 点 常歩	10 点 常歩	10 点 速歩
行進中の立止（招呼）	-----	5 点 常歩	10 点 速歩（招呼）
ダンベル持来	15 点	10 点	10 点
1m 障害と持来	15 点	15 点	15 点
斜壁と持来	15 点 持来なし	15 点	15 点
前進と伏せ	10 点	10 点	10 点
状況下での休止	10 点	10 点	10 点
合計	100 点	100 点	100 点

課題	IBGH-1	IBGH-2	IBGH-3
リード付き脚側行進	30 点	20 点	-----
ノーリード脚側行進	30 点	20 点	20 点
行進中の座れ	15 点	15 点	10 点
行進中の伏せ	15 点	15 点	10 点
行進中の立止	-----	-----	10 点
ダンベル持来	-----	10 点	15 点
斜壁と持来 (140cm)	-----	-----	15 点
前進と伏せ	-----	10 点	10 点
状況下での休止	10 点	10 点	10 点
合計	100 点	100 点	100 点

IBGH 1-3 に関する特記：

IBGH すべてのレベルにおける、招呼とダンベルの場面での正面停座は必須ではなく、終了基本姿勢の位置に直接、座ってもよい。犬が座ったあと、ダンベルを「Aus/放せ」の命令で受け取る前に 3 秒の時間を設けなければならない。

IBGH-3 に関する特記：

課題 2～6 の実行順番は次の 5 パターンから審査員が決定する。

パターン 1：課題 2 → 4 → 5 → 6 → 3

パターン 2：課題 4 → 3 → 6 → 2 → 5

パターン 3：課題 6 → 4 → 5 → 3 → 2

パターン 4：課題 3 → 2 → 6 → 5 → 4

パターン 5：課題 5 → 6 → 3 → 2 → 4

すべての出場者は課題 2～6 を同じ順序（パターン）で実行しなければならない。

申告

セクション B 服従の開始前にハンドラーと犬は審査員に対して申告を行う。
IGP-2, IGP-3, IBGH-3 はノーリードで、それ以外の試験レベルはリード付きで行う。

課題の開始と終了

各課題は審査員の指示によって開始される。脚側行進での「方向変換」「歩度の変更」「停止」などは審査員の指示なしで行う。特定の場面においては約 3 秒の時間を設ける。たとえば「正面停座→約 3 秒→次の終了基本姿勢に移る命令」、「正面停座→約 3 秒→ダンベルを受け取る」、「犬を褒める→約 3 秒→次の課題開始」。

ハンドラーが課題の実行を忘れた場合、審査員がハンドラーに指摘する。そしてハンドラ

一はその課題を実行する。そのことによる減点はない。ただし、課題の一部分を省略した場合は評価に影響する。例：脚側行進中の指示なし停座を忘れた（行わなかった）。

基本姿勢の実行

各課題は基本姿勢から開始されて基本姿勢で終了する。開始のための基本姿勢は一度で行う（回転したり何度も移動してはいけない）。基本姿勢で犬は「進行方向に真っ直ぐに」「ハンドラーを注目して」「犬の肩甲骨とハンドラーの膝が並列するように」ハンドラーの左側に座る。

基本姿勢においてハンドラーは足を広げて立ってはいけない。

腕（手）は軽く自分の体に触れていなければならない。

課題実行のための行進

「行進中の座れ」、「行進中の伏せと招呼」、「行進中の立止」、「前進と伏せ」を実行するために、基本姿勢からの脚側行進が常歩あるいは速歩で行われる。

犬への命令は最低 10 歩進んだ地点から最大 15 歩までの間で与えなければならない。

犬のもとに行く

何らかの姿勢で待っている犬のもとにハンドラーが行き、犬の右側に立つときは「犬の正面から直接」または「犬の左側から後ろを回って」のどちらでもよい。

招呼（呼び寄せ）⇒ 正面停座 ⇒ 終了基本姿勢への移動

犬を招呼するとき「呼び寄せの命令」の代わりに「犬の名前」を使用することができる。犬の名前に加えて何らかの命令を行った場合はダブルコマンドと見なされる。呼ばれた犬は「喜んで」「ひたむきに」「ダイレクトに」ハンドラーのもとに来て接近して真っ直ぐに正面停座を行う。次の「基本姿勢に移る命令」で、犬はダイレクトに終了基本姿勢のポジションに移動しなければならない。その際、ハンドラーの後ろを小回りしてくると回る、または頭を軸に体を（上から見て）180 度左反転する。どちらの方法で行ってもよい。

褒める

各課題の終了後に犬を褒めることができる。ただし、基本姿勢でのみ行うことができる。褒めたあと、そこから次の課題が開始される場合は約 3 秒の時間を設けなければならない。

実行姿勢の間違い

脚側行進中の命令によって犬が行う動作「座る」「伏せる」「立ち止まる」を間違った姿勢で行った場合、課題の評価が 50% 切り下げられる。間違った動作以外に何らかのミスがあった場合はその 50% とは別個にさらに評価が下がる（減点される）。

例：IGP-3 脚側行進中の座れの命令で犬は立ち止まった。それ以外にミスはなかった ⇒ $-2,5$ 点（5 点の 50%）＝得点 2,5 点となる。

例：IGP-3 脚側行進中の座れの命令で犬は立ち止まった。そして待っているときに落ち着きがなく少し動いた ⇒ $-2,5$ 点（5 点の 50%）さらに $-a$ 。したがって得点は 2,5 点未満となる。

ダンベルの受け渡し

犬が3回の命令でダンベルを放さない場合は、不服従のために失格となる（試験全体）。

ダンベル

持来の課題では、試験主催者が準備したダンベルだけが使用される。すべての出場者は同じダンベルを使用しなければならない。

例外：IBGH-2, IBGH-3 はハンドラーが準備したダンベルを使用できる。

ダンベルは次の条件を満たしていなければならない：

- › 木製であること
- › 規定どおりの重量であること
- › 地面に置いたときに握りの部分まで最低 4cm の間隔があること

	IGP-1	IGP-2	IGP-3
平面持来	650g	1kg	2kg
+障害	650g	650g	650g
+斜壁	-----	650g	650g

	IBGH-2	IBGH-3	IGP-V	IGP-ZTP
平面持来	ハンドラー持参	ハンドラー持参	ハンドラー持参	650g
+斜壁	-----	ハンドラー持参	-----	-----

障害

障害の寸法は、高さ 100cm×幅 150cm。試験中に練習ジャンプを行うことはできない。

斜壁

斜壁は幅 150cm、長さ 191cm の二枚の板が上部で連結されており、40 度に広げて設置したときに頂点が地面から 180cm となるように設計されている。斜壁は全体に滑り止めの加工がされていなければならない。両壁面の中間から最上部の間に 24mm×48mm の登坂補助の角材が 3 本ずつ取り付けられている。試験では全出場犬が同じ障害・斜壁を飛越しなければならない。試験中に練習ジャンプを行うことはできない。

IBGH-3 では斜壁の高さは 140cm に設定される。

服従 各課題の説明

脚側行進（リード付き／ノーリード） 銃声テスト

基本姿勢から脚側行進を実行するためのハンドラーによる一回の命令に従って犬は「注意して」「喜んで」「集中して」歩き出す。犬は常にハンドラーの左側で「肩甲骨とハンドラーの膝が並列する」位置で行進しなければならない。行進コースは脚側行進の実施要領図を参照。ハンドラーと犬は遅くとも、ペアのハンドラーが「休止のための基本姿勢」を行うときに、開始の基本姿勢でいなければならない。最初の直進を行進中に最低 15 歩離れた距離から 2 回の銃声テスト（6mm 口径）が行われる。（1 回目と 2 回目の間隔は 5 秒）

銃声テストは IGP-V, IGP-ZTP, IGP-1～3 でのみ行われる。

犬は銃声に対して無関心で行動しなければならない。犬が銃声シャイの反応を見せた場合、試験失格となる。それまでのすべての得点は取り消される。
犬の反応が明確でない場合、審査員はその犬をもう一度、単独でチェックできる。

BH/VT, IBGH-1～3 では銃声テストは実行されない。

ハンドラーは左反転ターンを必ず左回転で実行する（U の字で歩くのではなく、その場で 180 度左回転）。犬は左回転中のハンドラーの周囲を右小回りしてくるっと回る、またはハンドラーとの位置関係を変えずにハンドラーと同じ動作で頭を軸にして体を 180 度左反転する。速歩とゆっくり歩くときのスピードは常歩とハッキリと違うことを示さなければならない。歩度の切り替えは曖昧さを示すことなくダイレクトに行う。

2 回目の左反転ターンのあとにハンドラーは停止を行う。このとき犬は命令なしで直ちに座らなければならない。

静かに動いているグループ内の行進は「BH/VT, IGP-V, IGP-ZTP, IBGH-1, IBGH-2」はリード付きで、「IGP-1～3, IBGH-2, IBGH-3」はノーリードで実行する。ハンドラーと犬はグループの 1 人を軸にして右回り、他の 1 人を軸にして左回りを実行する（たとえば上から見て 8 の字）。そして最低 1 回、**グループ内の人に近いところで停止する**。犬は命令なしで直ちに座る。このとき審査員はグループ内行進の繰り返しをハンドラーに求めることができる。審査員の指示でハンドラーと犬はグループから離れて終了基本姿勢を行う。**犬を褒めることは終了基本姿勢を示したあとにのみ行える。**

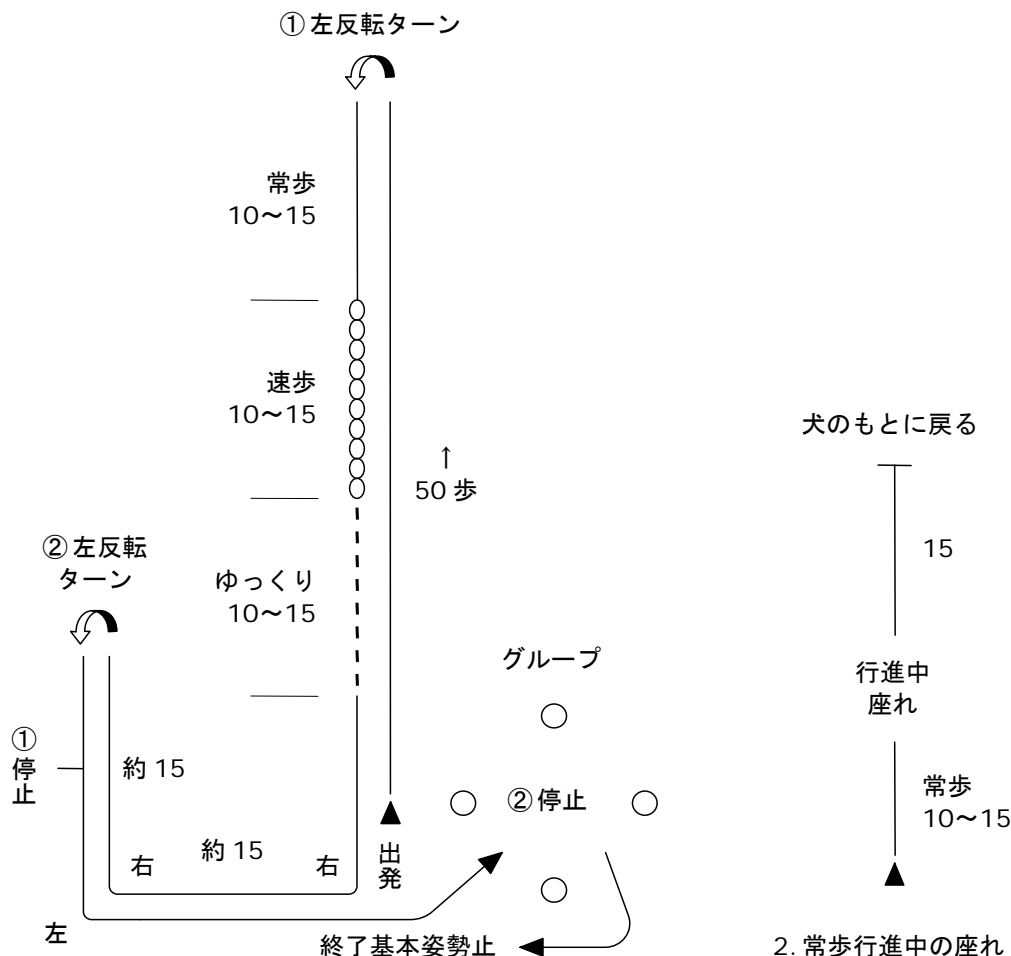
次の課題のために移動が必要なときも脚側行進を実行する。持来用のダンベルを取りに行くときも犬は脚側の正しい位置で歩行する。

BH/VT 特別規定：

1. 「リード付き脚側行進」は実施要領図のとおりに行う。（従来どおり）
2. 「ノーリード脚側行進」は大幅に変更された：

「基本姿勢」⇒「常歩 50 歩」⇒「左反転ターン」⇒「常歩 10～15 歩」⇒「速歩 10～15 歩」⇒「ゆっくり 10～15 歩」⇒「常歩 10～15 歩」⇒「停止・指示なし停座（終了基本姿勢）」

脚側行進要領図（リード付き／ノーリード）共通



【実行】脚側行進（リード付き／ノーリード）

- ≫ IGP-V, IGP-ZTP, IGP-1, IBGH-1, IBGH-2 ⇒ リード付きで申告
- ≫ IGP-2, IGP-3, IBGH-3 ⇒ ノーリードで申告

ハンドラーと犬は審査員のもとに行き犬を座らせて申告を行う。審査員への申告が済んだら（BH/VT, IBGH-1, IBGH-2）以外の、すべての試験レベルのハンドラーと犬は開始地点にてノーリードで基本姿勢を行う。そして、審査員の指示でハンドラーは課題を開始する。犬は「真っ直ぐで」「落ち着いており」「注意力のある」基本姿勢から、ハンドラーの「脚側行進開始の命令」に従って「注意して」「喜んで」「真っ直ぐに」「素早く」歩き出す。犬は常にハンドラーの左側で「肩甲骨とハンドラーの膝が並列する」位置で行進しなければならない。ハンドラーが停止したら、犬は命令なしで素早く座らないといけない。

「ハンドラーと犬は止まることなく直進 50 歩」⇒「①左反転ターン」⇒「常歩 10~15 歩」⇒「速歩 10~15 歩」⇒「ゆっくり 10~15 歩」⇒「常歩」⇒「右折 2 回」⇒「②左反転ターン」⇒「停止」⇒「左折」⇒「グループ」⇒「終了基本姿勢」。歩度の切り替えは曖昧さを示すことなくダイレクトに行く。歩度をチェンジするごとに命令を与えてもよい。

ハンドラーと犬はグループの 1 人を軸にして右回り、他の 1 人を軸にして左回りを実行す

る（たとえば上から見て8の字）。そして最低1回、**グループ内の人に近いところで停止する。**犬は命令なしで直ちに座る。

左反転ターンは次の二通りの方法のどちらで行ってもよい。
犬は左回転中のハンドラーの周囲を右小回りしてくると回る、またはハンドラーとの位置関係を変えずにハンドラーと同じ動作で頭を軸にして体を180度左反転する。ただし、脚側行進中の2回の左反転ターンは同じ方法でなければならない。

開始基本姿勢位置は終了基本姿勢位置でもある。

【評価基準】 脚側行進（リード付き／ノーリード）

「前に出る」、「横に離れる」、「遅れる」、「座る動作が遅いまたは躊躇する」、「余分な命令」、「体を使った補助行為」、「基本姿勢でのミス」、「注意力に欠ける」、「意欲の不足／暗い表情」、「抑制されて不自然」これらは度合いに応じて評価が下がる。

行進中の座れ（全試験レベル）

第1パート：「開始基本姿勢」「脚側行進」「座る動作」⇒50%／点数

第2パート：「ハンドラーが離れて戻ってくるまでの態度」「終了基本姿勢」⇒50%／点数

基本姿勢から脚側行進を行い10～15歩の間で「座る命令」をする。犬は「直ちに」「進行方向に真っ直ぐに」座る。ハンドラーは命令する際に動きを変えたり振り向いて見てはいけない。犬は「落ち着いて」「ハンドラーを注目して」座って待たなければならない。ハンドラーは15歩進んで立ち止まり振り返る（全試験レベル15歩）。審査員の指示で犬のもとに戻り、終了基本姿勢を示す。

BH/VT 特別規定／二通りの実行方法：①上記の方法で実行する。②脚側行進中の10～15歩の間でハンドラーは停止する。犬は素早く指示なし停座を行う→座れの命令を与えて犬から離れる。「停止時に犬が命令なしで停座を行うことが条件」（離れたあとの要領は同じ）

【評価基準】 行進中の座れ（全試験レベル）

「座り方がゆっくり」、「待っているときに落ち着きがない」、「ハンドラーに注目していない」、さらにその他のミス、これらは度合いに応じて評価が下がる。

犬が座らずに伏せた、または立ち止まった場合は－5点（IGP-3 －2,5点）
姿勢間違い以外にもミスがあった場合はさらにその減点が加算される。

行進中の伏せと招呼

第1パート：「開始基本姿勢」「脚側行進」「伏せる動作」⇒50%／点数

第2パート：「招呼」「正面停座」「終了基本姿勢」⇒50%／点数

基本姿勢から脚側行進を行い：

- ≫ IGP-V, IGP-ZTP, IGP-1, IGP-2, IBGH-1～3は、常歩10～15歩の間で
- ≫ IGP-3は、常歩10～15歩を行ったあと、速歩10～15歩の間で

“伏せる命令、”をする。犬は「直ちに」「進行方向に真っ直ぐに」伏せる。ハンドラーは命令する際に動きを変えたり振り向いて見てはいけない。ハンドラーは最低 30 歩（IGP-3 は速歩のまま）進んで立ち止まり振り返る。犬は呼ばれるまで「落ち着いて」「ハンドラーを注目して」伏せて待たなければならない。審査員の指示で“呼び寄せの命令、”をする。または“犬の呼び名、”で呼び寄せる。犬は「喜んで」「ひたむきに」「ダイレクトに」ハンドラーのもとに来て接近して真っ直ぐに正面停座を行う。次の“基本姿勢に移る命令、”で、犬は素早い動作でハンドラーの左側に移動して終了基本姿勢を行う。

3 秒ルールに注意「正面停座→約 3 秒→次の終了基本姿勢に移る命令」

BH/VT 特別規定／二通りの実行方法：①上記の方法で実行する。②脚側行進中の 10～15 歩の間でハンドラーは停止する。犬は素早く指示なし停座を行う→伏せを命じる→伏せたら追加の命令（マテ）なしで離れる。「停止時に犬が命令なしで停座を行うことが条件」（離れたあとの要領は同じ）

【評価基準】 行進中の伏せと招呼

「伏せ方がゆっくり」、「待っているときに落ち着きがない」、「ハンドラーに注目していない」、「走り方にひたむきさがなく」、「ハンドラーの補助行為」、「ハンドラーが両足を広げて立つ」、さらにその他のミス、これらは度合いに応じて評価が下がる。

犬が伏せずに座ったまたは立ち止まった場合、課題点数の 50%が減点される（10 点であれば－5 点）。姿勢間違い以外にもミスがあった場合はさらにその減点が加算される。

常歩行進中の立止（IGP-2, IBGH-3）

第 1 パート：「開始基本姿勢」「脚側行進」「立止動作」⇒ 50%／点数

第 2 パート：「ハンドラーが離れて戻ってくるまでの態度」「終了基本姿勢」⇒ 50%／点数

基本姿勢から脚側行進を行い 10～15 歩の間で“立止の命令、”をする。犬は「直ちに」「進行方向に真っ直ぐに」立ち止まる。ハンドラーは命令する際に動きを変えたり振り向いて見てはいけない。犬は「落ち着いて」「ハンドラーを注目して」立ち止まって待たなければならない。ハンドラーは 15 歩進んで立ち止まり振り返る。審査員の指示で犬のもとに戻り、犬の右側に立つ。審査員の指示で犬に座れを命令して終了基本姿勢を行う。

【評価基準】 常歩行進中の立止（IGP-2, IBGH-3）

「直ちに立ち止まらない」、「待っているときに落ち着きがない」、「ハンドラーに注目していない」、「ハンドラーの補助行為」、さらにその他のミス、これらは度合いに応じて評価が下がる。

犬が立止をせずに座ったまたは伏せた場合、IBGH-3 は－5 点、IGP-2 は－2,5 点 姿勢間違い以外にもミスがあった場合はさらにその減点が加算される。

速歩行進中の立止と招呼（IGP-3）

第 1 パート：「開始基本姿勢」「脚側行進」「立止動作」⇒ 50%／点数

第 2 パート：「招呼」「正面停座」「終了基本姿勢」⇒ 50%／点数

基本姿勢から直接、速歩脚側行進を行い 10～15 歩の間で「立止の命令」をする。犬は「直ちに」「進行方向に真っ直ぐに」立ち止まる。ハンドラーは命令する際に動きを変えたり振り向いて見えてはいけない。ハンドラーは最低 30 歩（速歩のまま）進んで立ち止まり振り返る。犬は呼ばれるまで「落ち着いて」「ハンドラーを注目して」立ち止まって待たなければならない。審査員の指示で「呼び寄せの命令」をする。または「犬の呼び名」で呼び寄せる。犬は「喜んで」「ひたむきに」「ダイレクトに」ハンドラーのもとに来て接近して真っ直ぐに正面停座を行う。次の「基本姿勢に移る命令」で、犬は素早い動作でハンドラーの左側に移動して終了基本姿勢を行う。

3 秒ルールに注意「正面停座→約 3 秒→次の終了基本姿勢に移る命令」

【評価基準】 速歩行進中の立止と招呼（IGP-3）

「直ちに立ち止まらない」、「待っているときに落ち着きがない」、「ハンドラーに注目していない」、「走り方にひたむきさがない」、「ハンドラーの補助行為」、「ハンドラーが両足を広げて立つ」、さらにその他のミス、これらは度合いに応じて評価が下がる。

犬が立止をせずに座ったまたは伏せた場合は－5 点。

姿勢間違い以外にもミスがあった場合はさらにその減点が加算される。

招呼において、犬に 2 回の追加命令（計 3 回）を与えてもハンドラーのもとに来ない場合、この課題は M/0 点となる。

ただし、犬を迎えに行ったあと、次の課題から続行できる。（失格とならない）

ダンベル持来

真っ直ぐな基本姿勢を示してから、ハンドラーはダンベルを約 10m 先に投げる。ダンベルを投げる際に足を一步踏み出してもよい。ただし、足を戻したあとに約 3 秒の時間を置く。投げたダンベルが静止したら「持ってくる命令」をする（審査員の指示はない）。命令された犬は「ダイレクトにダンベルに走り」「素早くくわえ上げ」「ダイレクトに」ハンドラーのもとにダンベルを持って来る。往路、復路ともに「ひたむきに」「意欲的」な仕事を示さなければならない。ハンドラーのもとに来るまで、そして正面停座を行ってハンドラーが「放せと命令」するまでの約 3 秒の間、くわえたダンベルは静かに保持しなければならない。正面停座においてはプレゼンテーション（持ってきたよ！とダンベルを差し出す犬の表情）が必要とされる。ダンベルを受け取ったあと、約 3 秒後の「基本姿勢に移る命令」で、犬は素早い動作でハンドラーの左側に移動して終了基本姿勢を行う。ダンベルは右手で持ち腕は下に伸ばす。ダンベルはハンドラーがスタンドに戻す。（犬とともに行く）

【評価基準】 ダンベル持来

「往路・復路での行動が、意欲的でない、ひたむきさがない」、「くわえ上げのミス」、「ダンベルを落とす」、「ダンベルをもて遊ぶ」、「チューイングする」、「ハンドラーが両足を広げて立つ」、「正面停座／基本姿勢でのミス（たとえば落ち着きがない）」、「ハンドラーの補助行為」これらは度合いに応じて評価が下がる。

障害／斜壁を実行する際の基本姿勢の位置

基本姿勢を行う位置は障害／斜壁から最低 4m の距離がなければならない。

1m 障害とダンベル持来

ハンドラーと犬は障害から最低 4m 手前の位置で基本姿勢を行う。真っ直ぐな基本姿勢を示してから、ハンドラーはダンベル（650g）を、1m 障害の向こう側に投げる。ダンベルを投げる際に足を一步踏み出してもよい。ただし、足を戻したあとに約 3 秒の時間を置く。犬は命令されずとも落ち着いて座っていなければならない。投げたダンベルが静止したら「ジャンプの命令」をする（審査員の指示はない）。そして犬がジャンプ中に「持ってくる命令」を与える。着地した犬は「ダイレクトにダンベルに走り」「素早くくわえ上げ」帰路ジャンプを行い、着地後は「ダイレクトに」ハンドラーのもとにダンベルを持って来る。犬はこの課題を「意欲的に」実行するとともに「力強いジャンプ」を示さなければならない。障害に接触してはならない。ハンドラーのもとに来るまで、そして正面停座を行ってハンドラーが「放せと命令」するまでの約 3 秒の間、くわえたダンベルは静かに保持しなければならない。正面停座においてはプレゼンテーション（持ってきたよ！とダンベルを差し出す犬の表情）が必要とされる。ダンベルを受け取ったあと、約 3 秒後の「基本姿勢に移る命令」で、犬は素早い動作でハンドラーの左側に移動して終了基本姿勢を行う。ダンベルは右手で持ち腕は下に伸ばす。ダンベルはハンドラーがスタンドに戻す。（犬とともに行く）

【評価基準】 1m 障害とダンベル持来

「意欲的でない、ひたむきさが無い」、「くわえ上げのミス」、「ダンベルを落とす」、「ダンベルをもて遊ぶ」、「チューイングする」、「ハンドラーが両足を広げて立つ」、「正面停座／基本姿勢でのミス（たとえば落ち着きがない）」、「ハンドラーの補助行為」これらは度合いに応じて評価が下がる。犬が障害に接触した場合はその都度 1 点までの減点。足を掛けた場合はその都度 2 点までの減点。

「往路ジャンプ／5 点」 - 「持来／5 点」 - 「帰路ジャンプ／5 点」この 3 つの区分課題のうち「最低 1 回のジャンプ」と「持来」を行わなければ得点を得ることができない。

- 往路または復路のジャンプをしなかった。持来に欠点はない。 得点 10 点
- 往路、復路、両方ジャンプを行った。しかし、持来しなかった。 得点 0 点

往路ジャンプで強い接触により障害が倒れてしまった場合、往路ジャンプは -5 点となり、その後、やり直しが行われるが、やり直しでは持来と復路ジャンプのみが評価される。

斜壁片道（IGP-1 のみ）

ハンドラーと犬は斜壁に向かって基本姿勢を行う。犬に「座れ」を命じてハンドラーは斜壁の反対側に行き、斜壁から最低 4m 離れた位置で斜壁に向かって立つ。審査員の指示で犬に「ジャンプと呼び寄せの命令」を与える。犬は力強いジャンプで斜壁を乗り越えハンドラーのもとに来て真っ直ぐに正面停座を行う。約 3 秒後の「基本姿勢に移る命令」で、犬は素早い動作でハンドラーの左側に移動して終了基本姿勢を行う。

【評価基準】 斜壁片道（IGP-1 のみ）

「基本姿勢でのミス」、「ジャンプをためらう」、「力強さに欠けるジャンプ」、「正面停座／基本姿勢でのミス」、「ハンドラーの補助行為」これらは度合いに応じて評価が下がる。

斜壁とダンベル持来

ハンドラーと犬は斜壁から最低 4m 手前の位置で基本姿勢を行う。真っ直ぐな基本姿勢を示してから、ハンドラーはダンベル（650g）を、高さ 180cm に設定された斜壁の向こう側に投げる。ダンベルを投げる際に足を一步踏み出してもよい。ただし、足を戻したあとに約 3 秒の時間を置く。犬は命令されずとも落ち着いて座っていなければならない。投げたダンベルが静止したら「ジャンプの命令」をする（審査員の指示はない）。そして犬がジャンプ中に「持ってくる命令」を与える。着地した犬は「ダイレクトにダンベルに走り」「素早くくわえ上げ」帰路ジャンプを行い、着地後は「ダイレクトに」ハンドラーのもとにダンベルを持って来る。犬はこの課題を「意欲的に」実行するとともに「力強いジャンプ」を示さなければならない。ハンドラーのもとに来るまで、そして正面停座を行ってハンドラーが「放せと命令」するまでの約 3 秒の間、くわえたダンベルは静かに保持しなければならない。正面停座においてはプレゼンテーション（持ってきたよ！とダンベルを差し出す犬の表情）が必要とされる。ダンベルを受け取ったあと、約 3 秒後の「基本姿勢に移る命令」で、犬は素早い動作でハンドラーの左側に移動して終了基本姿勢を行う。ダンベルは右手で持ち腕は下に伸ばす。ダンベルはハンドラーがスタンドに戻す。（犬とともに行く）

【評価基準】斜壁とダンベル持来

「意欲的でない、ひたむきさが無い」、「くわえ上げのミス」、「ダンベルを落とす」、「ダンベルをもて遊ぶ」、「チューイングする」、「ハンドラーが両足を広げて立つ」、「正面停座／基本姿勢でのミス（たとえば落ち着きがない）」、「ハンドラーの補助行為」これらは度合いに応じて評価が下がる。

この課題では犬は「最低 1 回のジャンプ」と「持来」を行わなければ得点を得ることができない。往路、復路どちらかのジャンプを行わなかった場合は－5 点。それ以外にもミスがあった場合はさらにその減点が加算される。

前進と伏せ

第 1 パート：「開始基本姿勢」「脚側行進」「前進動作」⇒ 50%／点数

第 2 パート：「審査員の指示→伏せる命令→伏せの実行」「終了基本姿勢」⇒ 50%／点数

犬の前進が必要な距離の 50%に達しない場合、あるいは 3 回の命令で「止まらない、場合、この課題は評価なし（0 点）となる。

基本姿勢から脚側行進を行い 10～15 歩の間で、ハンドラーは立ち止まると同時に腕を上げて一回の「前進の命令」をする。犬は「ひたむきに」「真っ直ぐに」「速いスピード」で指示された方向に最低 30 歩前進する。審査員の指示でハンドラーは犬に「伏せる命令」を与える。それに対して犬は直ちに伏せなければならない。ハンドラーは犬が伏せるまで腕を上げ続けていてもよい。審査員の指示でハンドラーは犬のもとに行き、伏せている犬の右側に立つ。約 3 秒後の審査員の指示で「座る命令」を与える。犬は素早く座り真っ直ぐな終了基本姿勢を行う。

【評価基準】前進と伏せ

「脚側行進でのミス」、「やる気のない前進」、「伏せる動作が遅い」、「伏せているときに落ち着きがない」、「終了基本姿勢でのミス」これらは度合いに応じて評価が下がる。

1 回目の命令で止まったが伏せない→2 回目の命令で伏せた	-1,5 点
1 回目の命令で止まったが伏せない→2 回目も伏せず 3 回目の命令で伏せた	-2,5 点
1 回目の命令で止まったが伏せない→2 回目、3 回目の命令でも伏せない	-3,5 点
1 回目の命令で止まらず走り続けた→2 回目の命令で止まって伏せた	-2,5 点
1 回目 2 回目の命令で止まらず走り続けた→3 回目の命令で止まって伏せた	-3,5 点
3 回の命令で止まらない	課題 0 点

犬は 1 回目の命令で伏せたが、審査員がハンドラーに犬のもとに行くように指示したあとに、犬が起き上がってハンドラーのほうに来た場合、ハンドラーの命令によって止まれば最大 5 点までの減点。これ以外にもミスがあった場合はさらにその減点が加算される。

翻訳者注記：ドイツ語原文は 1 回目以降の命令は「追加の命令」となっていますが、わかりやすいように単に 1 回目、2 回目、3 回目の命令としました。

状況下での休止

ペアのもう一頭の犬が課題を実行している間、状況下の休止が行われる。指定された位置で基本姿勢を行い、審査員の指示で犬に「伏せる命令」を与える。そして、ハンドラーは各試験レベルによって異なる位置へ振り向いて犬を見ることなく歩いて行く。

≫ IBGH-1~3, IGP-V, IGP-ZTP, IGP-1, IGP-2 = 最低 30 歩離れて犬に背中を向けて立つ（隠れない）

≫ IGP-3 = 最低 30 歩離れて犬が見えないように隠れる（一般的には防衛テントの中）

犬はハンドラーの影響（補助）を受けることなく、課題を実行している間、静かに伏せて待たなければならない。

【評価基準】状況下での休止

「基本姿勢でのミス」、「落ち着きがない」、「ハンドラーの補助行為」、「起き上がるのが早すぎる」、「立つまたは座る」、「休止場所から動く」これらは度合いに応じて評価が下がる。

犬が休止場所から 3m 以上離れた場合、以下のルールによって点数の 50%が減点される。それ以外にもミスがあった場合はさらにその減点が加算される。

IGP-1	ペアの犬が「3.行進中の伏せと招呼」を終えたあとに 3m 以上動いた
IGP-2	ペアの犬が「4.行進中の立止」を終えたあとに 3m 以上動いた
IGP-3	ペアの犬が「5.ダンベル持来」を終えたあとに 3m 以上動いた
IBGH-1	ペアの犬が「3.行進中の座れ」を終えたあとに 3m 以上動いた
IBGH-2	ペアの犬が「4.行進中の伏せ」を終えたあとに 3m 以上動いた
IBGH-3	ペアの犬が「5 番目の課題」を終えたあとに 3m 以上動いた
IGP-V	ペアの犬が「4.ダンベル持来」を終えたあとに 3m 以上動いた
IGP-ZTP	ペアの犬が「4.ダンベル持来」を終えたあとに 3m 以上動いた

ハンドラーが犬のもとに戻る場面で犬が立ち上がってハンドラーのほうに来た場合は最大 3 点までの減点。

犬を褒める

各課題の終了後（終了基本姿勢を示したあと）に犬を褒めることができる。その後、ハンドラーは次の課題のための新しい基本姿勢をとることができる。あるいは褒めたあとに同じ位置から次の課題を開始する場合は **3 秒間の時間を置く。**

特定の失敗により発生する減点一覧表

失敗の内容	IGP-1	IGP-2	IGP-3
行進中の座れで「座らなかった」	-5 点	-5 点	-2,5 点
行進中の伏せと招呼で「伏せなかった」	-5 点	-5 点	-5 点
行進中の立止（招呼）で「立止をしなかった」	-----	-2,5 点	-5 点
持来で「ダンベルを持ってこなかった」	0 点	0 点	0 点
ハンドラーが基本姿勢の位置を移動して持来の手助けをした	評価 M	評価 M	評価 M
1m 障害の「往路または復路を飛ばなかった」	-5 点	-5 点	-5 点
1m 障害の「往路復路の両方を飛ばなかった」	-15 点	-15 点	-15 点
1m 障害で「ダンベルを持来しなかった」	-15 点	-15 点	-15 点
斜壁の「往路または復路を飛ばなかった」	-15 点	-5 点	-5 点
斜壁の「往路と復路両方を飛ばなかった」	-----	-15 点	-15 点
斜壁で「ダンベルを持来しなかった」	-----	-15 点	-15 点

前進と伏せに関する特定の失敗により発生する減点は課題実行解説欄を参照。

C 防衛 *Schutzdienst* (IGP-1~3)

一般規定

原則として、防衛のすべての課題実行において、犬は防衛片袖だけをつかむこと（咬補すること）ができる。ヘルパーの保護されていない身体部分に咬みついた場合は失格となる。

スティック負荷テスト（ソフトムチによる犬への殴打）を法的に禁止している国では、防衛課題におけるスティックテストを行わずに IGP を実施することができる。

スティック負荷テストは、犬の肩部またはキ甲部にのみ行うことが許されている。

防衛課題実行中、すべての負荷段階場面において、犬は影響を受けることなく「深く」「エネルギーッシュに」そして「特に耐性のある安定したグリップ」を示さなければならない。

マーキング

IGP で規定されているマーキングは、ハンドラー、審査員、ヘルパーによく見えるように準備しなければならない。（マーキング要領図参照）

- ヘルパーに禁足咆哮中の犬を呼び戻すときのハンドラーの立ち位置。
- ヘルパーの逃走開始地点および逃走後 20 歩の地点。この 20 歩の間に犬はヘルパーの逃走を阻止しなければならない。
- ヘルパーの逃走阻止における犬の伏せ待機位置。
- ヘルパーの遠距離攻撃阻止におけるハンドラーと犬の待機位置。

テント（ヘルパーの隠れ場所）

防衛を行うために適切な広さの場所（たとえば公式サッカーグラウンド 105m×70m）の、左右それぞれの長辺に 3 ヶ所ずつ合計 6 ヶ所の“テント”が稲妻形に設置されている。（防衛設営図参照）この 6 ヶ所の“テント”は IGP-1~3 の防衛実施において設置されていなければならない。

翻訳者注記「ヘルパーの“隠れ場所”は材質や形は限定されていませんが、世界中で一般的に三角すいのテントが使用されているので本規定書では“テント”に統一しました」

基本的要件

評価は防衛全体の中で示される犬の「意欲」「自信」「負荷耐力」および「グリップ行動」そして「服従性」が審査される。犬は常に自信を持ってヘルパーとの闘争を求めていることを表現しなければならない。

防衛課題における評価

次の重要な評価基準に対して犬の行動が十分でない場合、度合いに応じて評価が下がる。

- 自信があり、ヘルパーの攻撃にひるむことのない反応でとらえたグリップは、放す動作に移るまで「固く・深く・落ち着いている」。

- ヘルパーから負荷をかけられている間もひるまない。
- ヘルパーに接近して行う注意力と支配力のある禁足。

課題の評価が下がるの意味：一つ下がる V→SG 二つ下がる V→G 三つ下がる V→B
下記のケースでほかにもミスがあった場合はさらにその減点が加算される。

評価が一つ下がる	・少し注意力に欠ける、そして／または、少しヘルパーにからむ
評価が二つ下がる	・とても注意力がない、そして／または、強くヘルパーにからむ
評価が三つ下がる	・監視をせずにただヘルパーの側にいるだけ
評価 M	・近づいてくるハンドラーのほうに犬が来る
防衛中止	・ヘルパーの負荷に耐えられず、防衛片袖を放してしまう、そしてヘルパーに制圧される ・審査員がハンドラーに犬のもとに行くように指示する前にヘルパーを見放して離れる／またはハンドラーの命令によってヘルパーのもとにとどまった

防衛片袖を放すための追加命令に対する評価および減点基準

1 回目の“放せの命令”で、犬が防衛片袖を放さない場合、審査員の指示に従ってさらに追加の命令を 2 回（計 3 回）行うことができる。

1 回目の命令	2 回目の命令		3 回目の命令		放さない あるいは命 令以外の方 法で放した
ためらって 放した	すぐに 放した	ためらって 放した	すぐに 放した	ためらって 放した	
減点 0,5~3	減点 3	減点 3,5~6	減点 6	減点 6,5~9	試験失格

翻訳者注記：ドイツ語原文は 1 回目以降の命令は「追加の命令」となっていますが、わかりやすいように単に 1 回目、2 回目、3 回目の命令としました。

（側面護送の場面に限り）もう一度、犬が防衛片袖を咬んだ場合、犬を制御するためにもう 1 回命令を与えることができる。

IGP-1~3 の課題と点数配分

課題	IGP-1	IGP-2	IGP-3
パトロール	5 点	5 点	10 点
禁足と咆哮	15 点	15 点	15 点
ヘルパーの逃走阻止	20 点	15 点	10 点
禁足中のヘルパーによる攻撃を防御	30 点	20 点	15 点
背面護送	-----	5 点	5 点
背面護送中にヘルパーが奇襲	-----	-----	15 点
ヘルパーの遠距離攻撃阻止	30 点	20 点	15 点
禁足中のヘルパーによる攻撃を防御	-----	20 点	15 点
合計	100 点	100 点	100 点

申告

IGP-V, IGP-ZTP, IGP-1 はリード付き、IGP-2, IGP-3 はノーリードで、ハンドラーと犬は審査員のもとで基本姿勢を行い申告を行う。申告後、パトロール開始地点に移動して、審査員のほうを向いて基本姿勢を行いハンドラーは審査員に対して手を上げる。

パトロール

開始地点で審査員のほうを向いて基本姿勢を行い手を上げる。それに対して審査員が合図を行えば、最初のパトロール地点の方向に犬と一緒に向き直ることができる。

IGP-1 テント 1 ヶ所	IGP-2 テント 4 ヶ所	IGP-3 テント 6 ヶ所
リード付きの犬とともにハンドラーは開始位置である 5 番テントと 6 番テントの中間地点に向かう。開始位置で基本姿勢を行ってからリードを外す。準備ができたなら腕を上げて合図する。審査員の合図のあと、ヘルパーが隠れている 6 番テントに犬を発進させる。	ノーリードの犬とともにハンドラーは開始位置である 3 番テントと中央ラインが直角で交差する地点に向かう。開始位置で基本姿勢を行い、準備ができたなら腕を上げて合図する。審査員の合図のあと、最初のパトロール地点の方向に向き直って犬を発進させる。	ノーリードの犬とともにハンドラーは開始位置である 1 番テントと中央ラインが直角で交差する地点に向かう。開始位置で基本姿勢を行い、準備ができたなら腕を上げて合図する。審査員の合図のあと、最初のパトロール地点の方向に向き直って犬を発進させる。

“パトロールの命令、と左右いずれかの腕による指示を使用して犬を発進させる。犬は素早くハンドラーから離れ「ひたむきにテントへと走り」「小回りで注意してテントを回る」。回り終えてテントの側面に犬が出てきたら“呼び寄せの命令、で呼び寄せて、犬の動きを止めることなく、新たな“パトロールの命令、と腕による指示で次のテントへと向かわせる。ハンドラーはこの一連の動作実行中、中央ライン上を歩いて進み、そのライン上から逸れてはいけない。最終テントに犬が到達したらハンドラーは立ち止まり、命令を与えたり指示をしたりしてはいけない。そして、審査員が指定位置に行くように指示するまで動いてはいけない。

【評価基準】パトロール

「開始基本姿勢において落ち着きがない」、「余分な命令または指示」、「ハンドラーが中央ラインから離れる」、「ハンドラーが普通で歩かない」、「テントに対して大回り」、「ハンドラーの指示に従わず犬が勝手にパトロールする」、「テントを回らないあるいは注意して回らない」、「犬は操縦性が悪く誘導が困難」これらは度合いに応じて評価が下がる。

パトロール中の犬をハンドラーが基本姿勢位置まで呼び戻した場合、この課題は 0 点となる。しかし、再発進後にパトロールが再開できたなら防衛作業は続行できる。ただし、その後、さらにもう一度、基本姿勢位置まで呼び戻した場合、防衛は“中止、となる。

犬は最終テントに向かったが、ヘルパーに気づかない場合、ハンドラーは犬に対して直接的に 6 番テントに行くことをさらに 2 回試行できる。その 2 回の試行が失敗した場合、防衛は“中止、となる。

禁足と咆哮（禁足 10 点+咆哮 5 点）

犬がヘルパーに到達したら、ハンドラーは立ち止まり、犬のもとに行くための審査員からの指示を待つ。犬はヘルパーに対して「自信のある」「アクティブな」「注意力のある禁足と連続的な咆哮」を行わなければならない。咆哮開始から約 20 秒後、審査員の指示でハンドラーは犬の後方 5 歩のところにマーキングされた位置に行く。

そのあとは下記の要領に従いこの課題を完了する：

IGP-1 3 パターンから選択	IGP-2, IGP-3 従来どおり
①審査員の指示で犬を基本姿勢位置に呼び寄せる。	審査員の指示で犬を終了基本姿勢位置に呼び寄せる。
②審査員の指示で禁足咆哮中の犬に近づき、座れを命令して基本姿勢を行い、リードを装着して、マーキング位置に犬とともに移動する。	
③リードを装着せずに②の方法を行う。	

【評価基準】 禁足と咆哮（禁足 10 点+咆哮 5 点）

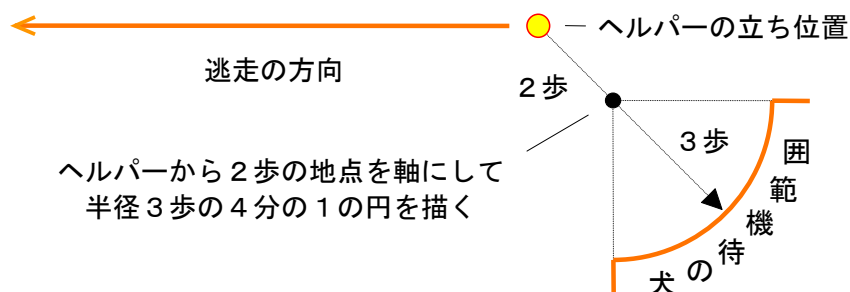
「ヘルパーに飛びつく」、「防衛片袖を咬む」、「自信のある強圧的な禁足が不十分」、「呼ばれるまで連続的で強圧な咆哮が不十分」これらは度合いに応じて評価が下がる。

犬は審査員や近づいて来るハンドラーに対して気を取られてはいけない。

「弱い」、「圧力に欠ける」、「エネルギッシュさに欠ける」、「咆哮が連続性に欠ける」	B 評価～M 評価
犬は吠えない。しかしヘルパーに対してアクティブ。	M 評価
口で突く、飛びつくなどの迷惑行為。	程度に応じて最大 M 評価まで
犬が強く防衛片袖を咬んだ。命令によって放した。	M 評価 最大-14 点
審査員が中央ラインで待機するハンドラーに来るように指示する前に犬がヘルパーを見放す。ハンドラーはもう一度、ヘルパーのもとに行くように指示できる。犬がヘルパーのもとにとどまれば防衛作業は続行できる。	M 評価 -14 点 （確定）
あるいは、犬がヘルパーのもとに行かない。あるいは行ったはいいがまた見放した。	防衛中止（TSB “ng”）
中央ラインで待機するハンドラーに、審査員がマーキング位置に行くことを指示後、ハンドラーが到着するまでの間に犬がヘルパーを見放す。または、ハンドラーが呼び戻しの命令をする前に犬がハンドラーのもとに来た。	部分評価が M 評価内となる
テント内で防衛片袖を咬んで自発的に放さない。ハンドラーは呼び戻しの位置へ行くように指示される。 放せの命令と呼び寄せの命令を必ず連結して使用して犬を呼び寄せなければならない。犬は戻ってきた。	M 評価 -14 点 （確定）
上記の状況で犬が戻ってこない。	“失格”

ヘルパーの逃走阻止

“Verhinderung／逃走阻止の命令”、“Ablassen／放せの命令”
 審査員の指示でハンドラーはヘルパーにテントから出るように指示する。ヘルパーは普通の歩度で逃走の開始地点に行く。ハンドラーと犬は伏せ待機位置に移動する。



IGP-1 伏せ待機位置への移動手順

ハンドラーと犬はノーリード（またはリード付き）で、伏せ待機位置に移動して基本姿勢を行う。犬はこの場面で「従順さ」「注意力」「集中力」を示さなければならない。そして「肩甲骨とハンドラーの膝が並列する」位置で行進しなければならない。リード付きを選択した場合、基本姿勢を行い、リードを外してから伏せを命令する。犬は直ちに素早く伏せを実行し「ヘルパーに対して落ち着いた確実な注意深い態度」でなければならない。ヘルパーと犬との距離は5歩。ハンドラーはテントに戻って待機して犬と審査員を注目する。この一連のセッティングが行われたあと逃走が開始される。

IGP-2, IGP-3 伏せ待機位置への移動手順

ハンドラーと犬はノーリードで、伏せ待機位置に移動して基本姿勢を行う。犬はこの場面で「従順さ」「注意力」「集中力」を示さなければならない。そして「肩甲骨とハンドラーの膝が並列する」位置で行進しなければならない。基本姿勢からハンドラーは犬に伏せを命令する。犬は直ちに素早く伏せを実行し「ヘルパーに対して落ち着いた確実な注意深い態度」でなければならない。ヘルパーと犬との距離は5歩。ハンドラーはテントに戻って待機して犬と審査員を注目する。この一連のセッティングが行われたあと逃走が開始される。

逃走阻止 実施要領（IGP-1～3 共通）

審査員の指示でヘルパーは逃走を開始する。同時にハンドラーは犬に一度だけ“逃走を阻止する命令”を与える。犬はそれに従ってヘルパーの逃走を阻止する。犬は「躊躇することなく」「高い決意で」「エネルギッシュに」「強力なグリップで」効果的に逃走を阻止しなければならない。犬はヘルパーが完全に停止して静かになったあとも、さらに約1秒のグリップ保持（Übergangsphase／移行過程）を示してから防衛片袖を放さなければならない。ハンドラーは移行過程1秒以上3秒以内のタイミングで、犬に“放せの命令”を審査員の指示なしで与えることができる。犬が片袖を放したあと、禁足場面が約5秒間展開される。

【評価基準】（IGP-1～3 共通）ヘルパーの逃走阻止

「決意がない」、「素早さがない」、「エネルギッシュな反応がない」、「強力なグリップで効果的に逃走を阻止していない」、「グリップに落ち着きがない」、「放すまでの深いグリップ

が不十分」、「禁足にて（接近・注意力・支配力）が不十分」これらは度合いに応じて評価が下がる。

ハンドラーが「逃走阻止の命令」を犬に与えなかった場合、この課題の評価が一つ下がる。犬が伏せたまま発進しない、あるいは20歩以内で逃走を阻止できなかった場合、防衛は「中止」となる。

禁足中のヘルパーによる攻撃を防御／ソフトムチ2回（IGP-1～3 共通）

命令：「Ablassen／放せの命令」、「Grundstellung／基本姿勢を行う命令」、各1回

禁足開始から約5秒後、審査員の指示でヘルパーは犬を攻撃する。犬はハンドラーの介入なしで「エネルギーに」「強力なグリップで」防御しなければならない。ヘルパーはムチで叩くようなそぶりで威嚇しながら攻め立てて犬に負荷を与える。この場面では、犬の「自信」「負荷耐力」「深く耐性のある安定したグリップ」が特に注目される。そして、ソフトムチによる負荷テストが2回実行される。審査員の指示によってヘルパーは攻め立てを終了して停止状態に移行する。このとき犬の背中をハンドラーのほうに向くようにする。犬はヘルパーが完全に停止して静かになったあとも、さらに約1秒のグリップ保持（Übergangsphase／移行過程）を示してから防衛片袖を放さなければならない。ハンドラーは移行過程1秒以上3秒以内のタイミングで、犬に「放せの命令」を審査員の指示なしで与えることができる。ヘルパーは停止してからのこの一連の過程の間、そして犬が防衛片袖を放したあとは、静かに立っていないなければならない。防衛片袖を放したあと、犬はヘルパーに対して「注意力」「自信」「高い支配力」のある禁足を行う。

IGP-1 禁足中の犬のもとに行ってからの手順

審査員の指示でハンドラーは犬のもとに普通の歩度で最短コースで行き、犬の右側に立ち「座れ」を命令して基本姿勢をとる。そして犬にリードを付ける。このときはヘルパーからソフトムチを取り上げない。「ヘルパーの遠距離攻撃阻止の発進待機位置」に移動するときにはリード付きかノーリードかはハンドラーが自由に選択できる。

IGP-2, IGP-3 禁足中の犬のもとに行ってからの手順

審査員の指示でハンドラーは犬のもとに普通の歩度で最短コースで行き、犬の右側に立ち「座れ」を命令して基本姿勢をとる。このときはヘルパーからソフトムチを取り上げない。

【評価基準】（IGP-1～3 共通）禁足中のヘルパーによる攻撃を防御 ソフトムチ2回

「決意がない」、「素早さがない」、「エネルギーな反応がない」、「強力なグリップで効果的に攻撃を阻止していない」、「グリップに落ち着きがない」、「放すまでの深いグリップが不十分」、「禁足にて（接近・注意力・支配力）が不十分」これらは度合いに応じて評価が下がる。

背面護送 IGP-2

命令：「für den Transport／護送のための命令」

背面護送はヘルパーが開始位置に立ったあと、ハンドラーがヘルパーに護送開始の指示を行ってから始まる。背面護送は30歩の距離を実行する。コーナーを設けることは必ずしも

必要としない。護送の進行方向は審査員が決定する。ハンドラーはヘルパーに対して前を歩くように指示する。そしてハンドラーと犬は約 8 歩の間隔を空けて、ヘルパーの後方をノーリードで脚側行進する。犬は護送中、ヘルパーを注意して監視する。約 8 歩の間隔は背面護送全体において維持しなければならない。審査員の指示でヘルパーは停止する。ハンドラーと犬は注意した監視を保ちながら、そのまま進みヘルパーの隣に立つ。犬はこのとき基本姿勢（座る）を行う。そしてヘルパーからソフトムチを取り上げる。その後、審査員のもとまで約 20 歩の側面護送を行う。このとき犬に“護送を行うための命令、”を与えることができる。犬はハンドラーとヘルパーの中間位置で行進する。護送中、犬はヘルパーを注意して監視しなければならない。そして「ヘルパーを押し」、「飛びつく」、「防衛片袖を咬む」ことをしてはならない。審査員のもとで側面護送を終了して基本姿勢を行う。ソフトムチを審査員に渡して、防衛作業の第一パート終了を告げる。

背面護送 IGP-3

命令：“für den Transport／護送のための命令、”

背面護送はヘルパーが開始位置に立ったあと、ハンドラーがヘルパーに護送開始の指示を行ってから始まる。背面護送は 30 歩の距離を実行する。コーナーを設けることは必ずしも必要としない。護送の進行方向は審査員が決定する。ハンドラーはヘルパーに対して前を歩くように指示する。そしてハンドラーと犬は約 8 歩の間隔を空けて、ヘルパーの後方をノーリードで脚側行進する。犬は護送中、ヘルパーを注意して監視する。約 8 歩の間隔は背面護送全体において維持しなければならない。

【評価基準】背面護送

「ハンドラーから離れよう（発進しよう）とする」「意気消沈」「ヘルパーを注意して監視しない」「脚側行進の犬の位置が正しくない」これらは度合いに応じて評価が下がる。

背面護送中にヘルパーが奇襲 IGP-3 のみ

命令：“Ablassen／放せの命令、” “Grundstellung／基本姿勢を行う命令、” 各 1 回

審査員の指示で背面護送中にいったん止まることなくヘルパーの奇襲が犬に対して実行される。犬はハンドラーの介入なしで「躊躇せずに」「エネルギーに」「強力なグリップで」防御しなければならない。犬が防衛片袖を咬補したら、ヘルパーはムチで叩くようなそぶりで威嚇しながら攻め立てて犬に負荷を与える。この場面では、犬の「自信」「負荷耐力」「深く固く耐性のある安定したグリップ」が特に注目される。審査員の指示によってヘルパーは攻め立てを終了して停止状態に移行する。犬はヘルパーが完全に停止して静かになったあとも、さらに約 1 秒のグリップ保持（Übergangsphase／移行過程）を示してから防衛片袖を放さなければならない。ハンドラーは移行過程 1 秒以上 3 秒以内のタイミングで、犬に“放せの命令、”を審査員の指示なしで与えることができる。ヘルパーは停止してからのこの一連の過程の間、そして犬が防衛片袖を放したあとは、静かに立っていなければならない。防衛片袖を放したあと、犬はヘルパーに対して「接近した」「自信」「高い支配力」「注意力」のある禁足を行う。審査員の指示でハンドラーは犬のもとに普通の歩度で最短コースで行き、犬の右側に立ち“座れ、”を命令して基本姿勢をとる。そしてヘルパーからソフトムチを取り上げる。その後、ヘルパーの右側で新たな基本姿勢を行う。そして審査員のもとまで約 20 歩の側面護送を行う。このとき犬に“護送を行うための命令、”を与えることができる。犬はハンドラーとヘルパーの中間位置で行進する。護送中、犬はヘルパーを注意して監視しなければならない。そして「ヘルパーを押し」、「飛びつく」、「防

衛片袖を咬む」ことをしてはならない。審査員のもとで側面護送を終了して基本姿勢を行う。ソフトムチを審査員に渡して、防衛作業の第一パート終了を告げる。

【評価基準】(IGP-3のみ) 背面護送中にヘルパーが奇襲

「決意がない」、「素早さがない」、「エネルギーな反応がない」、「強力なグリップで効果的に攻撃を阻止していない」、「グリップに落ち着きがない」、「放すまでの深いグリップが不十分」、「禁足にて(接近・注意力・支配力)が不十分」これらは度合いに応じて評価が下がる。

ヘルパーの遠距離攻撃阻止

命令: "Ablassen/放せの命令、"Hinsetzen und Transport/座れと護送を行う命令、

犬に対する「駆逐の声出し、はすべてのレベルにおいて実行されなければならない。最初の「駆逐の声出し、は犬の方向に走り始めたときに発せられる。

IGP-1 ヘルパーの遠距離攻撃阻止 実施要領

ヘルパーはこの課題の前に実行された「禁足中のヘルパーによる攻撃を防御」が終了した位置にいる。ハンドラーはリード付きまたはノーリードの犬とともに約 30m 離れた「ヘルパーの遠距離攻撃阻止の発進待機位置」へと移動する。このとき犬はハンドラーの膝に並列する正しい位置で行進しなければならない。待機位置に到達したハンドラーは立ち止まり犬とともにヘルパーのほうに向き直る。犬に座れの命令を与えて基本姿勢を行い、リードを外す(装着されていた場合)。犬は落ち着いてヘルパーのほうを注目する。ハンドラーは犬のチェーンカラーを持ってよい。ただし、ハンドラーは犬の興奮を煽ってはいけない。審査員の指示でヘルパーは駆逐の声出しと激しい威嚇態度で正面から犬に攻撃を仕掛ける。審査員の指示で直ちにハンドラーは一度だけの命令で防衛のために犬を発進させる。犬はヘルパーの攻撃に「ためらうことなく」「高い支配力」「決意」で立ち向かわなければならない。犬が防衛片袖を咬補したら、ヘルパーはムチで叩くようなそぶりで威嚇しながら攻め立てて犬に負荷を与える。この場面では、犬の「自信」「負荷耐力」「深く固く耐性のある安定したグリップ」が特に注目される。ハンドラーは発進位置から動いてはいけない。審査員の指示によってヘルパーは攻め立てを終了して停止状態に移行する。このとき犬の背中をハンドラーのほうに向くようにする。犬はヘルパーが完全に停止して静かになったあとも、さらに約 1 秒のグリップ保持(Übergangsphase/移行過程)を示してから防衛片袖を放さなければならない。ハンドラーは移行過程 1 秒以上 3 秒以内のタイミングで、犬に「放せの命令、を審査員の指示なしで与えることができる。ヘルパーは停止してからのこの一連の過程の間、そして犬が防衛片袖を放したあとは、静かに立っていないなければならない。防衛片袖を放したあと、犬はヘルパーに対して「注意力」「自信」「高い支配力」のある禁足を行わなければならない。審査員の指示でハンドラーは犬のもとに行き、犬の右側に立ち「座れ、を命令して基本姿勢をとる。そして犬にリードを付ける。このときヘルパーからソフトムチを取り上げる。その後、ヘルパーの右側で新たな基本姿勢を行う。そして審査員のもとまで約 20 歩の側面護送を、リード付きまたはノーリードで行う。このとき犬に「Fuß/脚側行進の命令、または「Transport/護送のための命令、を与えることができる。犬はハンドラーとヘルパーの中間位置で行進する。護送中、犬はヘルパーを注意して監視しなければならない。そして「ヘルパーを押し」、「飛びつく」、「防衛片袖を咬む」ことをしてはならない。審査員のもとで側面護送を終了して基本姿勢を行う。ソフトムチを審査員に渡して、防衛作業の終了を告げる。審査員の指示でハンドラーのコントロール下あるリード付きの犬とともに審査講評の位置へ移動する。

IGP-2 ヘルパーの遠距離攻撃阻止 実施要領

ハンドラーはこの課題の前に実行された「背面護送」が終了した位置から、ノーリードの犬とともに約 40m 離れた「ヘルパーの遠距離攻撃阻止の発進待機位置」へと移動する。このとき犬はハンドラーの膝に並列する正しい位置で**注意して**行進しなければならない。待機位置に到達したハンドラーは立ち止まり犬とともにヘルパーのほうに向き直る。犬に座れの命令を与えて基本姿勢を行う。犬は落ち着いてヘルパーのほうを注目する。ハンドラーは犬のチェーンカラーを持ってよい。ただし、ハンドラーは犬の興奮を煽ってはいけない。審査員の指示でヘルパーは駆逐の声出しと激しい威嚇態度で正面から犬に攻撃を仕掛ける。審査員の指示で直ちにハンドラーは一度だけの命令で防衛のために犬を発進させる。犬はヘルパーの攻撃に「ためらうことなく」「高い支配力」「決意」で立ち向かわなければならない。犬が防衛片袖を咬補したら、ヘルパーはムチで叩くようなそぶりで威嚇しながら攻め立てて犬に負荷を与える。この場面では、犬の「自信」「負荷耐力」「深く固く耐性のある安定したグリップ」が特に注目される。ハンドラーは発進位置から動いてはいけない。審査員の指示によってヘルパーは攻め立てを終了して停止状態に移行する。このとき犬の背中をハンドラーのほうに向くようにする。犬はヘルパーが完全に停止して静かになったあとも、さらに約 1 秒のグリップ保持(Übergangsphase / 移行過程)を示してから防衛片袖を放さなければならない。ハンドラーは移行過程 1 秒以上 3 秒以内のタイミングで、犬に「放せの命令」を審査員の指示なしで与えることができる。ヘルパーは停止してからのこの一連の過程の間、そして犬が防衛片袖を放したあとは、静かに立っていないなければならない。防衛片袖を放したあと、犬はヘルパーに対して「注意力」「自信」「高い支配力」のある禁足を約 5 秒間行わなければならない。

IGP-3 ヘルパーの遠距離攻撃阻止 実施要領

ハンドラーはこの課題の前に実行された「背面護送中にヘルパーが奇襲」の側面護送が終了した位置から、ノーリードの犬とともに 1 番テントと中央ラインが直角で交差する地点にマーキングされた「ヘルパーの遠距離攻撃阻止の発進待機位置」へと移動する。このとき犬はハンドラーの膝に並列する正しい位置で**「真っ直ぐに」「注意して」「喜んで」「集中して」**行進しなければならない。待機位置に到達したハンドラーは立ち止まり犬とともにヘルパーのほうに向き直る。犬に座れの命令を与えて基本姿勢を行う。犬は**真っ直ぐに座り**、落ち着いてヘルパーのほうを注目する。ハンドラーは犬のチェーンカラーを持ってよい。ただし、ハンドラーは犬の興奮を煽ってはいけない。審査員の指示でソフトムチを装備したヘルパーはテントから出てセンターラインに向かって走る。センターラインに達したヘルパーはハンドラーのほうに方向を変換して駆け足のまま攻撃態勢に入る。ハンドラーと犬に対して駆逐の声出しと激しい威嚇態度で正面から犬に攻撃を仕掛ける。そしてヘルパーがハンドラーと犬から 50m の地点に近づいたら審査員の指示で直ちにハンドラーは一度だけの命令で防衛のために犬を発進させる。犬はヘルパーの攻撃に「ためらうことなく」「高い支配力」「決意」で立ち向かわなければならない。犬が防衛片袖を咬補したら、ヘルパーはムチで叩くようなそぶりで威嚇しながら攻め立てて犬に負荷を与える。この場面では、犬の「自信」「負荷耐力」「深く固く耐性のある安定したグリップ」が特に注目される。ハンドラーは発進位置から動いてはいけない。審査員の指示によってヘルパーは攻め立てを終了して停止状態に移行する。このとき犬の背中をハンドラーのほうに向くようにする。犬はヘルパーが完全に停止して静かになったあとも、さらに約 1 秒のグリップ保持(Übergangsphase / 移行過程)を示してから防衛片袖を放さなければならない。ハンドラーは移行過程 1 秒以上 3 秒以内のタイミングで、犬に「放せの命令」を審査員の指示なしで与えることができる。ヘルパーは停止してからのこの一連の過程の間、そして犬が防衛片袖を放したあとは、静かに立っていないなければならない。防衛片袖を放したあと、犬はヘルパーに対して「注意力」「自信」「高い支配力」のある禁足を約 5 秒間行わなければならない。

【評価基準】(IGP-1~3 共通) ヘルパーの遠距離攻撃阻止

「決意がない」、「素早さがない」、「エネルギッシュな反応がない」、「強力なグリップで効果的に攻撃を阻止していない」、「グリップに落ち着きがない」、「放すまでの深いグリップが不十分」、「禁足にて（接近・注意力・支配力）が不十分」これらは度合いに応じて評価が下がる。

禁足中のヘルパーによる攻撃を防御／防衛作業完結要領 (IGP-2, IGP-3)
IGP-3 のみソフトムチ 2 回

命令：“Ablassen／放せの命令、“Hinsetzen und Transport／座れと護送を行う命令、

この課題の前に実行された「ヘルパーの遠距離攻撃阻止」の禁足場面において、審査員の指示でヘルパーは犬を攻撃する。

犬はハンドラーの介入なしで「エネルギッシュに」「強力なグリップで」防御しなければならない。

ヘルパーはムチで叩くようなそぶりで威嚇しながら攻め立てて犬に負荷を与える。この場面では、犬の「自信」「負荷耐力」「深く耐性のある安定したグリップ」が特に注目される。そして、**(IGP-3 のみ) ソフトムチによる負荷テストが 2 回実行される。**審査員の指示によってヘルパーは攻め立てを終了して停止状態に移行する。このとき犬の背中をハンドラーのほうに向くようにする。犬はヘルパーが完全に停止して静かになったあとも、さらに**約 1 秒のグリップ保持 (Übergangsphase／移行過程) を示してから防衛片袖を放さなければならない。**ハンドラーは移行過程 1 秒以上 3 秒以内のタイミングで、犬に**“放せの命令、**を審査員の指示なしで与えることができる。ヘルパーは停止してからのこの一連の過程の間、そして犬が防衛片袖を放したあとは、静かに立っていなければならない。防衛片袖を放したあと、犬はヘルパーに対して「注意力」「自信」「高い支配力」のある禁足を行う。審査員の指示でハンドラーは犬のもとに行き、犬の右側に立ち**“座れ、**を命令して基本姿勢をとる。そしてヘルパーからソフトムチを取り上げる。ヘルパーの武装解除（ムチを取り上げる行為）の方法はハンドラーが自由に選択できる。**ただし、ヘルパーに犬の左側に移動するように要求することはできない。犬とハンドラーがヘルパーの右側に移動しなければならない。**その後、ヘルパーの右側で新たな基本姿勢を行う。そして審査員のもとまで約 20 歩の側面護送を行う。このとき犬に**“護送を行うための命令、**を与えることができる。犬はハンドラーとヘルパーの中間位置で行進する。護送中、犬はヘルパーを注意して監視しなければならない。そして「ヘルパーを押し」、「飛びつく」、「防衛片袖を咬む」ことをしてはならない。審査員のもとで側面護送を終了して基本姿勢を行う。ソフトムチを審査員に渡して、防衛作業の終了を告げる。そしてノーリードの犬とともに約 5 歩の脚側行進を行ったあと終了基本姿勢を行う。このときにリードを付ける。そしてハンドラーのコントロール下にある犬とともに審査講評の位置へ移動する。

【評価基準】(IGP-2, IGP-3) 禁足中のヘルパーによる攻撃を防御

「決意がない」、「素早さがない」、「エネルギッシュな反応がない」、「強力なグリップで効果的に攻撃を阻止していない」、「グリップに落ち着きがない」、「放すまでの深いグリップが不十分」、「禁足にて（接近・注意力・支配力）が不十分」これらは度合いに応じて評価が下がる。

IGP-ZTP

IGP-Zuchttauglichkeitsprüfung 国際作業犬繁殖適性試験

セクション A “追求”、および、セクション B “服従”、の実行は一般規定に基づいて行う。
セクション C “防衛”、に関しては下記の実施要領に従い実行する。

セクション A “追求”

「ハンドラーが印跡」、「最低 300 歩」、「直線コース×3」、「直角コーナー×2」、「ハンドラーが準備した物品 3 個（7 点+7 点+7 点）」、「印跡後待機時間 20 分」、「制限時間 15 分」

セクション B “服従”、（銃声テストあり）

1. リード付き脚側行進	25 点
2. 行進中の座れ	15 点
3. 行進中の伏せと招呼	20 点
4. ダンベル持来	20 点
5. 障害飛越（80cm）	10 点
6. 状況下での休止	10 点
合計	100 点

セクション C “防衛”、（課題 2 においてソフトムチ 2 回）

1. 禁足と咆哮	15 点
2. 行進中にヘルパーが奇襲（行進 10 点+奇襲 30 点）	40 点
3. ハンドラーと犬に対するヘルパーの攻撃	40 点
4. 審査員のもとまで側面護送	5 点
合計	100 点

【全般】 IGP-ZTP 防衛

原則として、防衛のすべての課題実行において、犬は防衛片袖だけをつかむこと（咬補すること）ができる。ヘルパーの保護されていない身体部分に咬みついた場合は失格となる。スティック負荷テストは、犬の肩部またはキ甲部にのみ行うことが許されている。
IGP-ZTP の防衛においても “TSB”、評価は行われる。

【実施要領】 IGP-ZTP 防衛

1. 禁足と咆哮 15 点

命令（例）：“Revier／パトロールの命令”、または “Vorán／前進の命令”、

ヘルパーはハンドラーと犬から約 20 歩離れたテントの中で、犬に見えないように立っている。審査員の指示でハンドラーは犬からリードを外して “Revier／パトロールの命令”、または “Vorán 前進の命令”、と腕による指示（任意）で、犬をテントに向けて発進する。

犬はヘルパーに対して「アクティブで注意力のある禁足」と「連続的な咆哮」を行わなければならない。犬はヘルパーに飛びついたり、防衛片袖を咬んだりしてはいけない。ハン

ドラーは審査員の指示で直ちに犬のもとに行き、犬の首輪をつかむ（ヘルパーがテントから出て行けるようにする）。そして、ヘルパーがテントから出て行ったら、ハンドラーは犬にリードを付けて、ヘルパーの行方を見ないようにテントの中で基本姿勢を行う。

2. 行進中にヘルパーが奇襲／ソフトムチ 2 回（行進 10 点＋奇襲 30 点）

命令：“Fuß／脚側行進の命令”、または“Transport／護送の命令”、“Stell／防御の命令”、または“Voran／前進の命令”、“Aus／放せの命令”、“Sitz／座れの命令”、

審査員の指示でヘルパーが移動して潜んでいる新たなテントから 30 歩離れたマーキング地点に移動して基本姿勢を行い、犬からリードを外す。外したリードは左肩に掛けて右腰で結ぶ、あるいはポケットに入れる。審査員の指示でハンドラーと犬はヘルパーが潜んでいるテントに向かってノーリード脚側行進で進む。このとき犬はハンドラーから離れずに歩く。テントから 10 歩の地点にハンドラーあるいは犬が到達したら、審査員の指示でヘルパーはハンドラーと犬に向かって駆逐の声出しとともに攻撃を仕掛ける。犬は「直ちに」「自信のあるエネルギーギッシュな行動」で、ヘルパーの攻撃を「固く深い咬補」で防御しなければならない。犬がヘルパーの攻撃を防御する際、ハンドラーは犬を鼓舞することができる。犬が咬補したあと、ヘルパーがソフトムチで 2 回の負荷テストを実行する。ハンドラーはこの間、立ち止まっていなければならない。審査員の指示でヘルパーは攻撃を停止して静かに立つ。犬は自らの判断で、あるいはハンドラーの“Aus／放せの命令”で防衛片袖を放し、ヘルパーを禁足する。ハンドラーは放せの命令を犬に与える際、犬に影響を与えることなく静かに立ち止まっていなければならない。審査員の指示で直ちにハンドラーは普通の歩度で最短コースで犬のもとに行き、座れの命令を与えて基本姿勢を行う。このとき犬の首輪をつかんでもよいが刺激を与えてはいけない。

3. ハンドラーと犬に対するヘルパーの攻撃 40 点

審査員の指示でヘルパーは歩いてハンドラーと犬のもとを去る。約 40 歩離れた地点でヘルパーはハンドラーのほうに向き直り、駆逐の声出しと激しい威嚇態度で正面からハンドラーと犬に攻撃を仕掛ける。ヘルパーが約 30 の距離まで近づいたとき、審査員の指示でハンドラーは“abwehren／防御の命令”とともに犬を発進させる。犬は攻撃を「ためらうことなく」「エネルギーギッシュに」「力強い咬補」で防御しなければならない。犬はヘルパーの防衛片袖だけを咬補することができる。ハンドラーはこの間、立ち止まっていなければならない。審査員の指示でヘルパーは攻撃を停止して静かに立つ。そして、犬は直ちに防衛片袖を放さなければならない。あるいは、ハンドラーが適正なタイミングで“ablassen／放せの命令”を審査員の指示なしで与えることができる。ハンドラーは放せの命令を犬に与える際、犬に影響を与えることなく静かに立ち止まっていなければならない。犬は防衛片袖を放したあと、ヘルパーに対して「接近した」「注意力」のある禁足を行わなければならない。審査員の指示で直ちにハンドラーは普通の歩度で最短コースで犬のもとに行き、座れの命令を与えて基本姿勢を行い、犬にリードを付ける。

4. 審査員のもとまで側面護送 5 点

命令：“Fuß／脚側行進の命令”、または“Transport／護送の命令”、

「ハンドラーと犬に対するヘルパーの攻撃」の課題が終了した場面から、審査員のもとまで約 10 歩の側面護送を行う。その際“Fuß／脚側行進の命令”、または“Transport／護送の命令”を犬に与えることができる。犬はハンドラーとヘルパーの中間位置で行進する。護送中、犬はヘルパーを注意して監視しなければならない。そして「ヘルパーを押し」、「飛びつく」、「防衛片袖を咬む」ことをしてはならない。審査員のもとで側面護送を終了して、防衛作業の終了を告げる。

IGP-V

IGP-Vorstufe
国際作業犬基礎試験

IGP-V（国際作業犬基礎試験）は、IGP-1 試験への前段階（義務ではない）として FCI 作業犬委員会によって考案された。

IGP-V（国際作業犬基礎試験）の使用例：

1. 成犬クラス出場申し込みのための訓練資格として。
2. 各国組織は IGP-V を IGP-1 の前段階として必須とするかを独自に決定できる。

【受験規定】

犬は試験日に受験可能月齢（15 ヶ月）に達していなければならない。例外は認められない。受験の前提条件として各国組織の規定に従い BH/VT に合格していなければならない。

セクション A “追求”、および、セクション B “服従” の実行は一般規定に基づいて行う。セクション C “防衛” に関しては下記の実施要領に従い実行する。

【課題と配点】

セクション A “追求”

「ハンドラーが印跡」、「最低 200 歩」、「直線コース×2」、「直角コーナー×1」、「ハンドラーが準備した物品 2 個（11 点+10 点）」、「印跡後待機時間なし」、「制限時間 10 分」

セクション B “服従”（銃声テストあり）

1. リード付き脚側行進	30 点
2. ノーリード脚側行進	20 点
3. 行進中の伏せと招呼	15 点
4. ダンベル持来	15 点
5. 障害飛越（80cm）	10 点
6. 状況下での休止	10 点
合計	100 点

セクション C “防衛”（負荷テストなし）

1. 禁足と咆哮	15 点
2. ヘルパーの逃走阻止	30 点
3. ハンドラーと犬に対するヘルパーの攻撃	50 点
4. 審査員のもとまで側面護送	5 点
合計	100 点

【全般】 IGP-V 防衛

IGP-V の防衛においても “TSB” 評価は行われる。防衛ヘルパーはソフトムチを所持して

いるが殴打することはせず、威嚇のためだけに使用する。

【実施要領】 IGP-V 防衛

1. 禁足と咆哮 15 点

命令（例）：“Revier／パトロールの命令”、または “Voran／前進の命令”、

ヘルパーはハンドラーと犬から約 20 歩離れたテントの中で、犬に見えないように立っている。審査員の指示でハンドラーは犬からリードを外して “Revier／パトロールの命令”、または “Voran 前進の命令”、と腕による指示（任意）で、犬をテントに向けて発進する。

犬はヘルパーに対して「アクティブで注意力のある禁足」と「連続的な咆哮」を行わなければならない。犬はヘルパーに飛びついたり、防衛片袖を咬んだりしてはいけない。ハンドラーは審査員の指示で直ちに犬のもとに行き、犬の首輪をつかむ。

2. ヘルパーの逃走阻止 30 点

命令：“Ablassen／放せの命令”、

禁足咆哮中の犬の首輪をハンドラーがしっかりとつかんで静かに犬を後退させたら、ヘルパーはテントから出て、逃走のために駆け出す。審査員の指示でハンドラーは “逃走阻止の命令”、とともにつかんでいた首輪を放して犬をヘルパーに向かわせる。犬は自主的にエネルギーが強い咬捕で効果的に逃走を阻止する。犬はヘルパーの防衛片袖だけを咬捕することが許されている。審査員の指示でヘルパーは停止する。ヘルパーが完全に停止したあと、犬は直ちに防衛片袖を放す。ハンドラーは適正なタイミングで “ablassen／放せの命令”、を審査員の指示なしで与えることができる。ハンドラーは放せの命令を犬に与える際、犬に影響を与えることなく静かに立ち止まっていなければならない。犬は防衛片袖を放したあと、ヘルパーに対して「接近した」「注意力」のある禁足を行わなければならない。審査員の指示で直ちにハンドラーは普通の歩度で最短コースで犬のもとに行き、犬の首輪をつかむ。

3. ハンドラーと犬に対するヘルパーの攻撃 50 点

命令（例）：“Stell／防御の命令”、または “Voran／前進の命令”、“Aus／放せの命令”、“Sitz／座れの命令”、

「ヘルパーの逃走阻止の最終場面から続けて」～ ハンドラーは犬の首輪を保持し続ける。このとき、犬の興奮をかき立ててはいけない。審査員の指示でヘルパーはハンドラーと犬から歩いて離れる。ヘルパーは約 20 歩離れたら振り返ってハンドラーと犬に向かって駆逐の声出しとともに攻撃を仕掛ける。審査員の指示でハンドラーは “abwehren／防御の命令”、とともに犬を発進させる。犬は攻撃を「ためらうことなく」「エネルギーに」「力強い咬捕」で防御しなければならない。犬はヘルパーの防衛片袖だけを咬捕することができる。ハンドラーはこの間、立ち止まっていなければならない。審査員の指示でヘルパーは攻撃を停止して静かに立つ。そして、犬は直ちに防衛片袖を放さなければならない。あるいは、ハンドラーが適正なタイミングで “ablassen／放せの命令”、を審査員の指示なしで与えることができる。ハンドラーは放せの命令を犬に与える際、犬に影響を与えることなく静かに立ち止まっていなければならない。犬は防衛片袖を放したあと、ヘルパーに対して「接近した」「注意力」のある禁足を行わなければならない。審査員の指示で直ちにハン

ドラーは普通の歩度で最短コースで犬のもとに行き、座れの命令を与えて基本姿勢を行い、犬にリードを付ける。

4. 審査員のもとまで側面護送 5点

命令（例）：“Fuß／脚側行進の命令、または “Transport／護送の命令、

「ハンドラーと犬に対するヘルパーの攻撃」の課題が終了した場面から、審査員のもとまで約 10 歩の側面護送を行う。その際 “Fuß／脚側行進の命令、または “Transport／護送の命令、を犬に与えることができる。犬はハンドラーとヘルパーの中間位置で行進する。護送中、犬はヘルパーを注意して監視しなければならない。そして「ヘルパーを押す」、「飛びつく」、「防衛片袖を咬む」ことをしてはならない。審査員のもとで側面護送を終了して、防衛作業の終了を告げる。

FPr UPr SPr GPr (IGP-単課目)

FPr 1-3, UPr 1-3, SPr 1-3, GPr 1-3 に出場するには BH/VT 資格さえあればよい。IGP 資格は必要ない。

どの単課目のどのレベルに出場するかはハンドラーが自由に決めることができる。

FPr 1-3 (Fährtenprüfung 1-3) 追求単課目

追求試験 FPr 1~3 は IGP-1~3 の “追求、を単課目で行う。
どのレベルに出場するかはハンドラーが自由に決めることができる。

試験でこの訓練資格を得たとしてもショーまたは展覧会規定、繁殖規定、選定規定で有効とならない。

満点	Mangelhaft M 不可	Befriedigend B 可	Gut G 良	Sehr Gut SG 特良	Vorzüglich V 優
100	0~69	70~79	80~89	90~95	96~100

追求試験は必ずしもレベル 1~3 の順序で行う必要はない。

UPr 1-3 (Unterordnungsprüfung 1-3) 服従単課目

服従試験 UPr 1~3 は IGP-1~3 の “服従、を単課目で行う。
どのレベルに出場するかはハンドラーが自由に決めることができる。

試験でこの訓練資格を得たとしてもショーまたは展覧会規定、繁殖規定、選定規定で有効とならない。

満点	Mangelhaft M 不可	Befriedigend B 可	Gut G 良	Sehr Gut SG 特良	Vorzüglich V 優
100	0~69	70~79	80~89	90~95	96~100

服従試験は必ずしもレベル 1~3 の順序で行う必要はない。

SPr 1-3 (Schutzdienstprüfung 1-3) 防衛単課目

防衛試験 SPr 1~3 は IGP-1~3 の “防衛、を単課目で行う。
どのレベルに出場するかはハンドラーが自由に決めることができる。

試験でこの訓練資格を得たとしてもショーまたは展覧会規定、繁殖規定、選定規定で有効とならない。

注意：防衛だけの単課目競技会の開催は許可されない。

満点	Mangelhaft M 不可	Befriedigend B 可	Gut G 良	Sehr Gut SG 特良	Vorzüglich V 優
100	0~69	70~79	80~89	90~95	96~100

防衛試験は必ずしもレベル 1~3 の順序で行う必要はない。

GPr 1-3 (Gebrauchshundprüfung 1 - 3) 服従+防衛

合計 200 点

作業犬試験 GPr 1~3 は IGP-1~3 の追求を除いた “服従+防衛、を行う。
どのレベルに出場するかはハンドラーが自由に決めることができる。

試験でこの訓練資格を得たとしてもショーまたは展覧会規定、繁殖規定、選定規定で有効とならない。

合計点	Mangelhaft M 不可	Befriedigend B 可	Gut G 良	Sehr Gut SG 特良	Vorzüglich V 優
200	0~139	140~159	160~179	180~190	191~200

**AUSDAUERPRÜFUNG**
国際耐久性試験**A. 全般****目的**

耐久性試験の目的は、犬がある程度の身体的努力を行ったあとでも、大きな疲労を示さないことを証明するためである。犬の体躯構成と体調は試験に必要な要件を満たしていなければならない。試験では、内臓、特に心臓や肺、さらに運動器官自体に対して負担となる課題が実行される。それにより犬の性格や苦難に対する強度も調べる。犬がこの試験を苦にせず実行するという事は、犬に身体的健康と資質が存在する証拠として見なさなければならない。

試験開始前に犬の個体識別確認をしなければならない。

他の試験と同様に試験開催規定は、各国組織によって決定され適用される。受験の記録は訓練手帳、あるいは血統書に必ず記入しなければならない。試験結果は評価リスト（成績表）に記入しなければならない。

耐久性試験が夏季に開催される場合、主催者は早朝または夕方に試験を実施することが義務となる。気温が 22°C 以上の場合は試験を行ってはいけない。耐久性試験への参加は任意である。耐久性試験中にハンドラーあるいは犬が身体的損傷を負った場合、主催者および担当審査員は責任を負うことができない。

犬の受験条件

犬が受験できる月齢は 16 ヶ月以上。1 日の試験において一人の審査員が審査できるのは最低 4 頭、最大 20 頭まで。21 頭以上の場合はもう一人審査員を追加しなくてはならない。一人の受験者（ハンドラー）が受験できるのは 1 頭のみ。犬は完全に健康でよく鍛錬されていなければならない。病気、十分に強くない犬、発情中、妊娠中または授乳中のメス犬の受験は認められない。

試験開始時に受験者は担当審査員に申告する。審査員は犬の体調を確認しなければならない。疲れている、あるいは気だるそうな印象を与える犬は、試験から除外しなければならない。犬が試験中に過度の疲労や、その他の悪影響を示した場合は、その犬の試験は中止しなければならない。いずれの場合においても、その判断は審査員が行い、その決定は絶対的である。

評価

点数と評価は授与されず “Bestanden／合格、または “Nicht bestanden／不合格、が発表される。

地表条件

試験は道路上で行われるべきであり、そしてさまざまな地表条件が使用される。たとえば：アスファルト道路、舗装道路、未舗装道路、道。

耐久性試験の実施内容

時速 12km から 15km の速度で 20km の距離にて行われる。

課題実行要領

自転車に乗ったハンドラーの右側でリード付きの犬は普通に走る（交通規制に従って）。無理なスピードで走らせることは避ける。リードは犬の走るテンポに適応させて長さを調節して保持する。リード固定装置（"Springer"）を使用してもよい。犬がリードをわずかに引っ張って前に行こうとすることは問題ないが、遅れることがあってはいけない。

8km 走った地点で 15 分間の休憩を取る。この休憩時間に審査員は犬の疲労具合を観察する。過度に疲労している犬はこの時点で試験から除外される。

休憩後、さらに 7km 走った地点で、20 分間の休憩を取る。この休憩中、犬は自由に、そして制御されずに動く機会を与えられなければならない。更なる歩行試験の前に、審査員は犬の疲労度合い、あるいは足を負傷していないかを調べる。過度に疲労している、または足を負傷している犬はこの時点で試験から除外される。

歩行試験（20km）が完了したら、15 分間の休憩を取る。この休憩中、犬は自由に、そして制御されずに動く機会を与えられなければならない。審査員は犬の疲労度合い、あるいは足を負傷していないかを調べる。

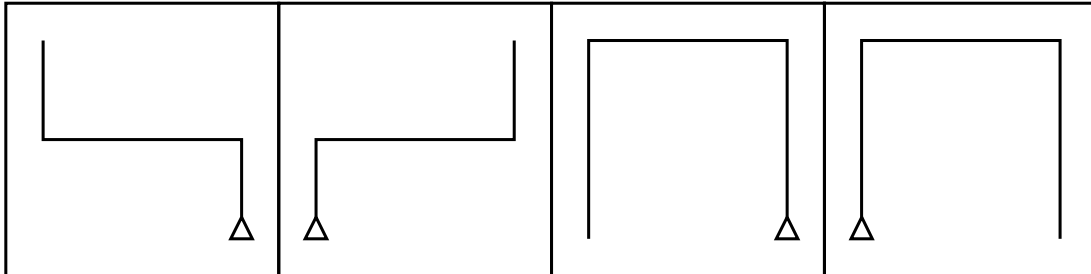
審査員と試験監督は、自転車または自動車を受験犬について行かなければならない。審査員は犬に関する所見を記入しなければならない。試験中に過度の疲労で試験続行不能となった犬のために、試験の主催者は自動車について行かなければならない。試験続行不能となった犬は、その自動車で輸送される。

犬が過度の疲労を示した場合、または時速 12km の速度を維持できず、かなりの時間超過があった場合、試験は不合格となる。

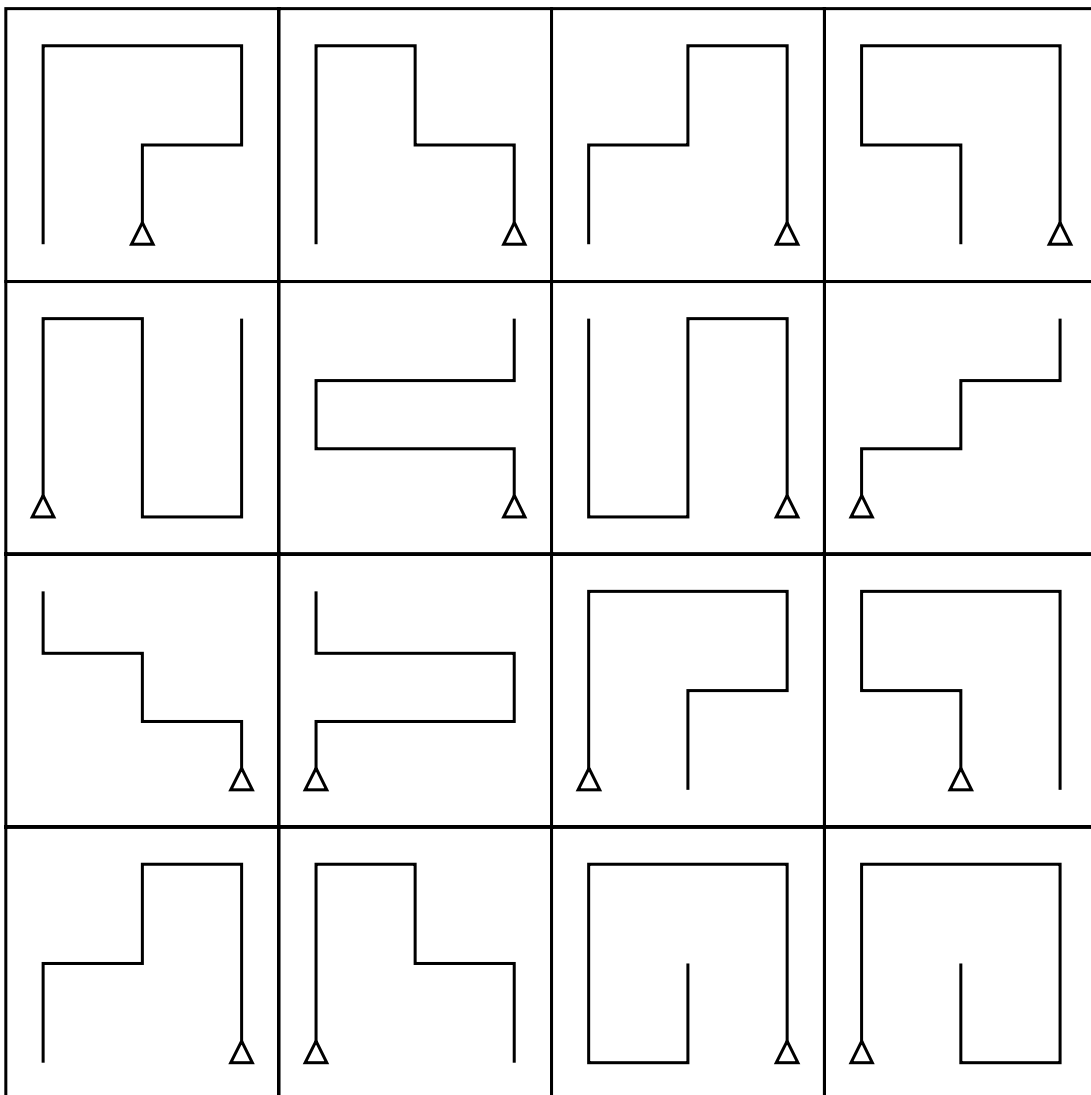
追求コース／印跡要領

これより以下に例示する追求コースは鏡像（左右対称）でも使用可能

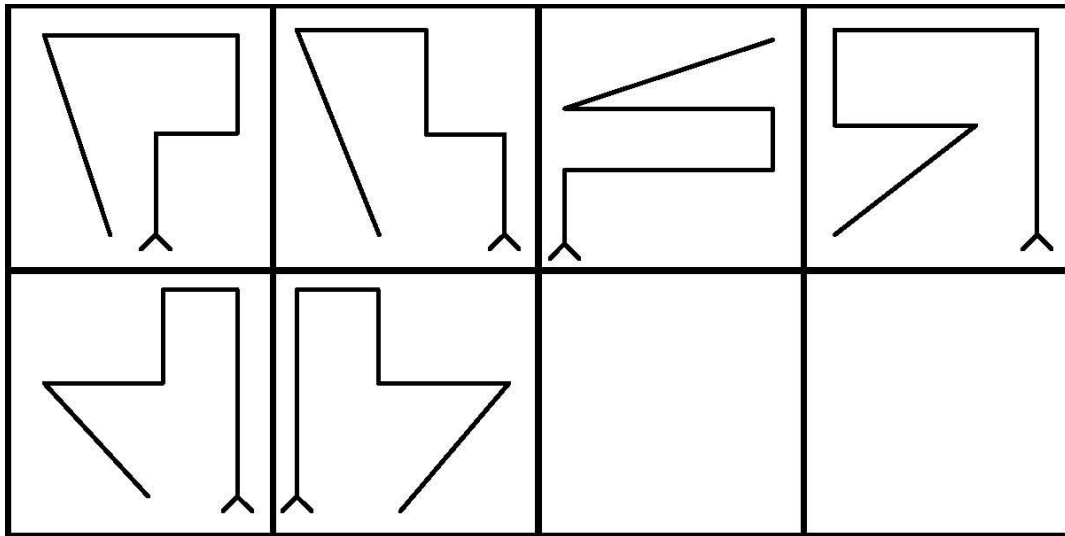
IGP-1, IGP-2 追求コース



IGP-3 追求コース

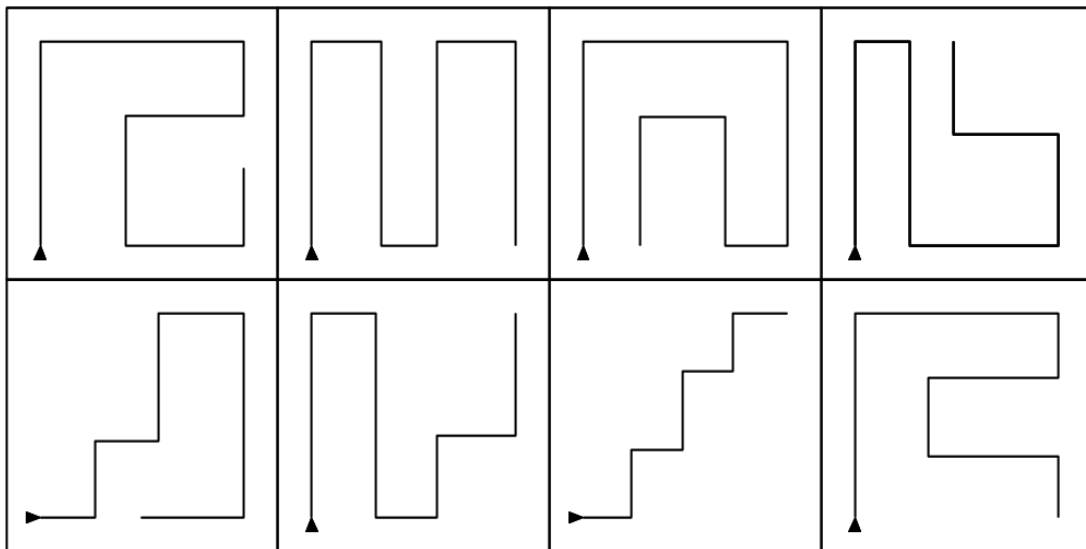


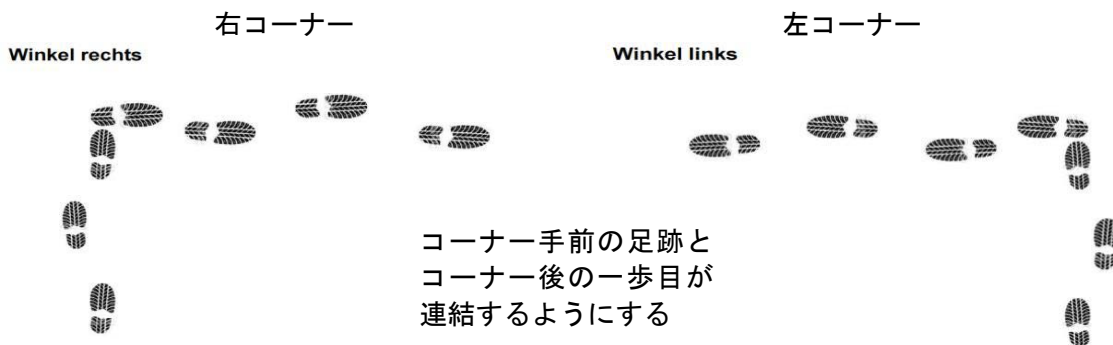
IFH-V 使用可能追求コース (例)



FH-1 追求コース (例)

(単にコースとコーナーの数を表しただけの図面であり正確な縮尺ではない)

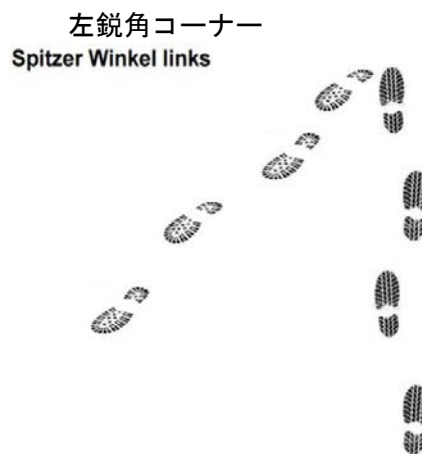




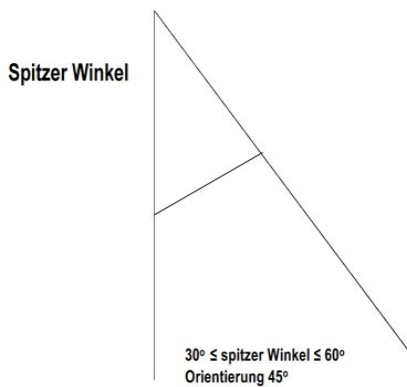
物品配置方法 1
Ablegen des Gegenstandes



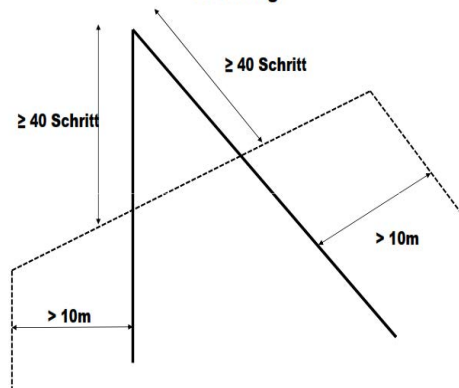
物品配置方法 2
Ablegen des Gegenstandes alternativ



鋭角は 45 度方向 (30~60 度以内)

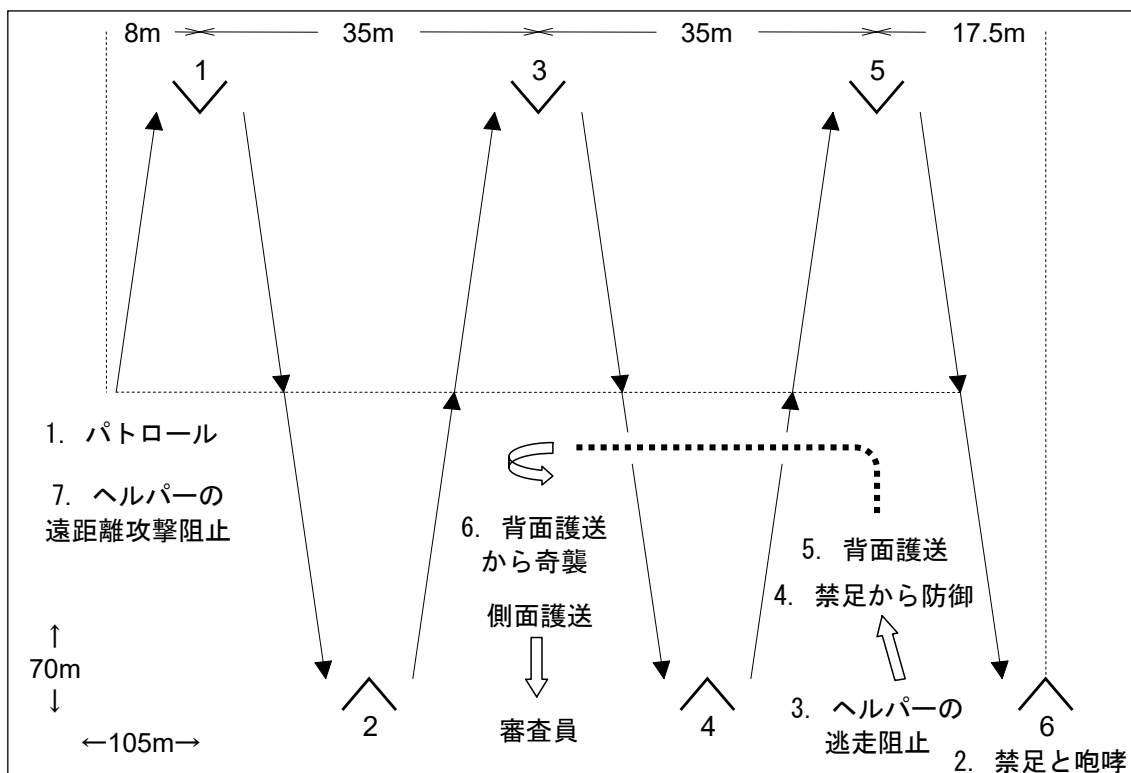


誘惑線はコーナーから 40 歩以上
コースから 10m 以上間隔を空ける

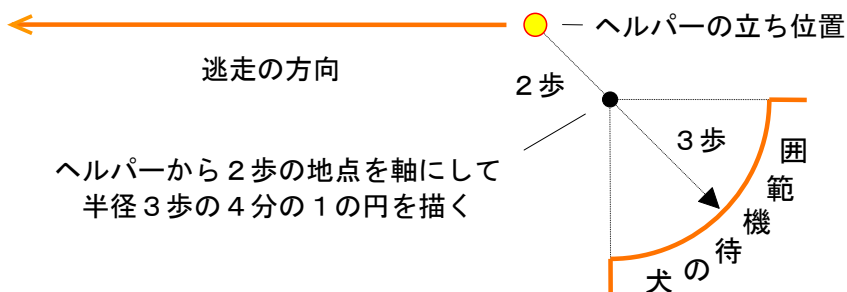


IGP 添付資料

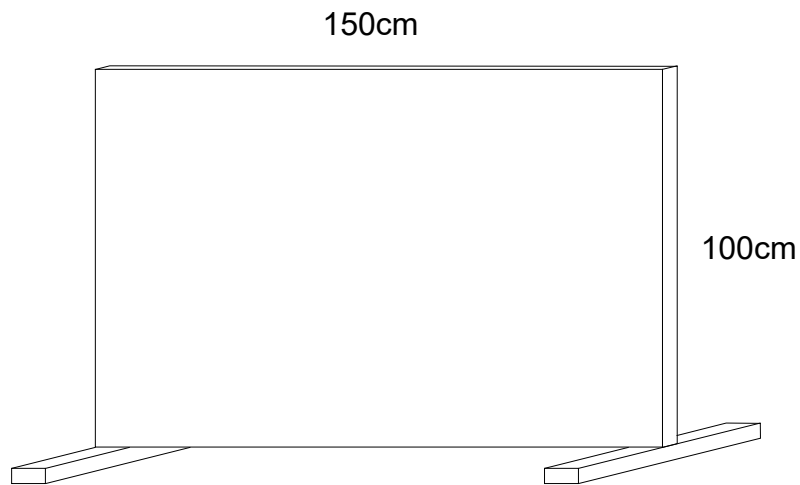
“防衛設営” 左右対称設営も可能（備考：公式サッカー場 105m×70m の場合）



“逃走阻止の配置図”

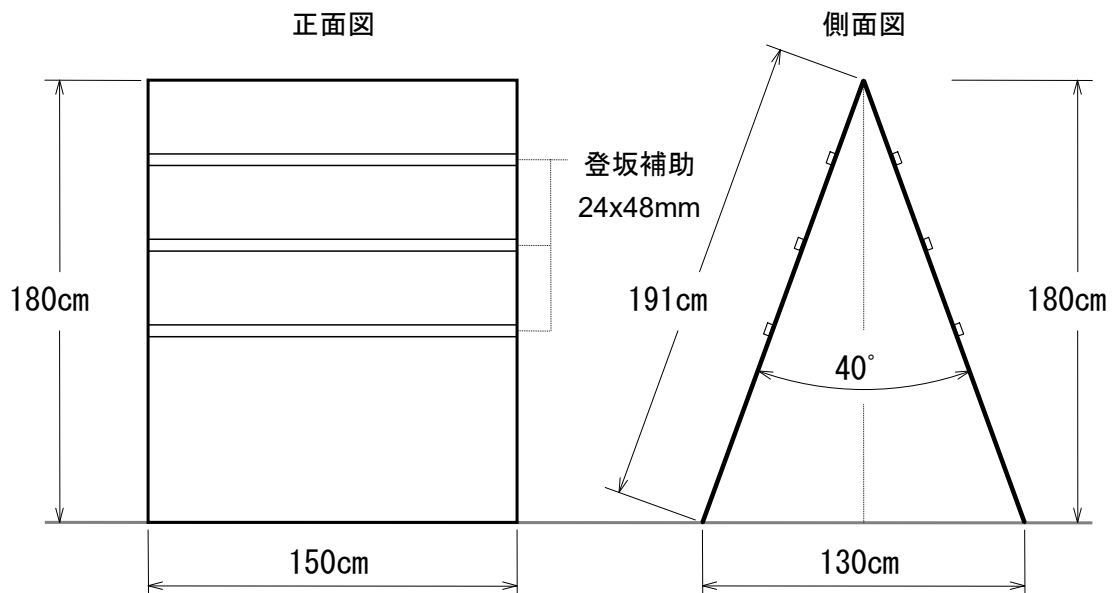


“1m 障害”



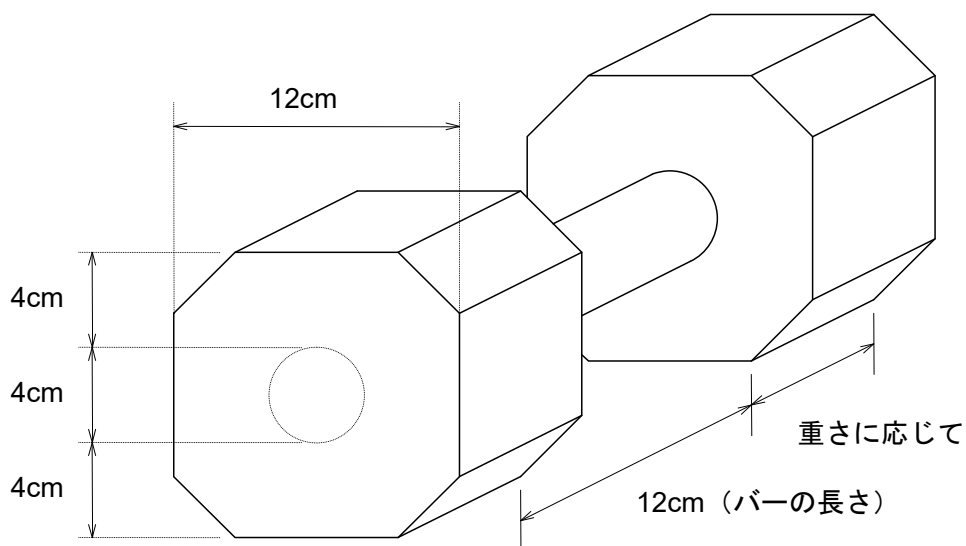
障害の高さは 100cm、幅は 150cm（図面参照）。
試験中に慣らし飛びをさせることはできない。

“斜壁”



斜壁は幅 150cm、長さ 191cm の二枚の板が上部で連結されており、40 度に広げて設置したときに頂点が地面から 180cm となるように設計されている。斜壁は全体に滑り止めの加工がされていなければならない。両壁面の中間から最上部の間に 24mm×48mm の登坂補助の角材が 3 本ずつ取り付けられている。試験では全出場犬が同じ障害・斜壁を飛越しなければならない。試験中に練習ジャンプを行うことはできない。

“木製ダンベル”



	IGP-1	IGP-2	IGP-3
ダンベル持来	650g	1kg	2kg
1m 障害とダンベル持来	650g	650g	650g
斜壁とダンベル持来	-----	650g	650g

持来課題では木製ダンベルだけが使用できる。すべての出場者は試験主催者が準備したダンベルを使用しなければならない。ハンドラー個人のダンベルを使用することはできない。この規定書に示されたダンベルの図面（寸法）は単に一例である。重要なのは重さが正しいということと、犬がくわえるバー部分が木製であり、そのバーと地面の間に 4cm の空間があるということ。

国際作業犬試験規定

2018年12月24日発行

翻訳／発行 益田晴夫

〒615-0835 京都市右京区西京極堤下町 30

TEL 075-313-1789

©無断転載禁止